

裁縫
全書

東
帯
の
部

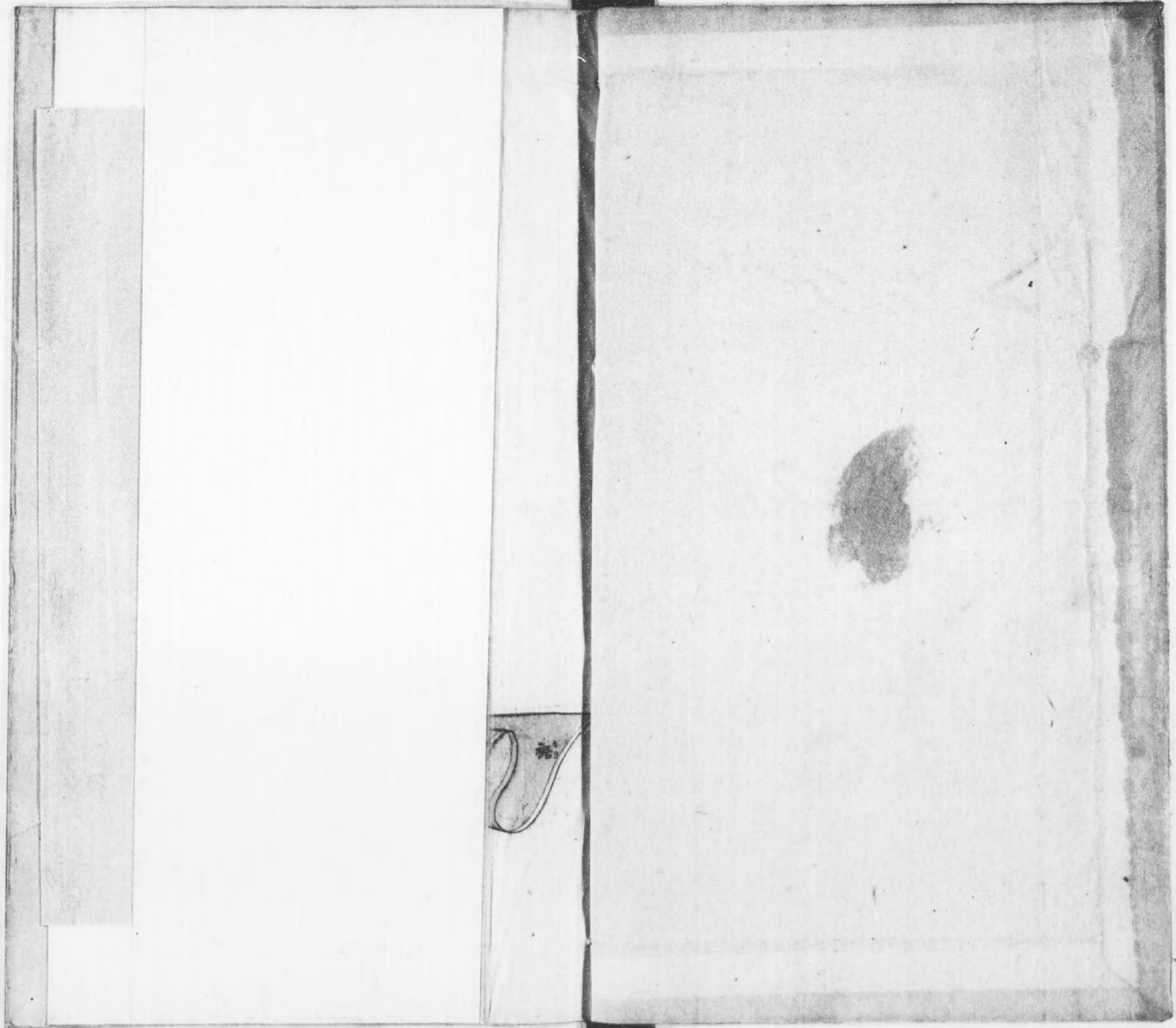
特116

528

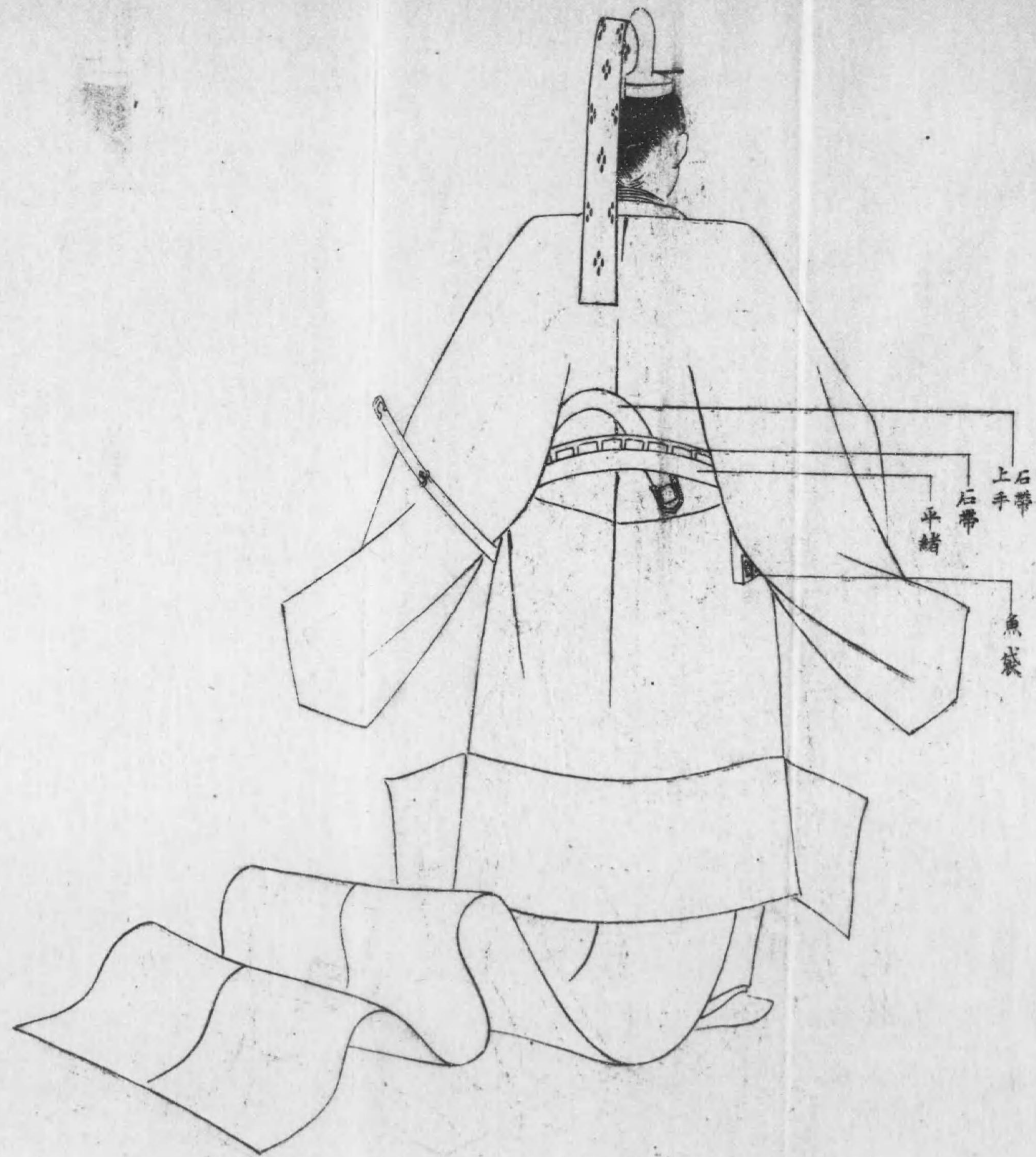


始









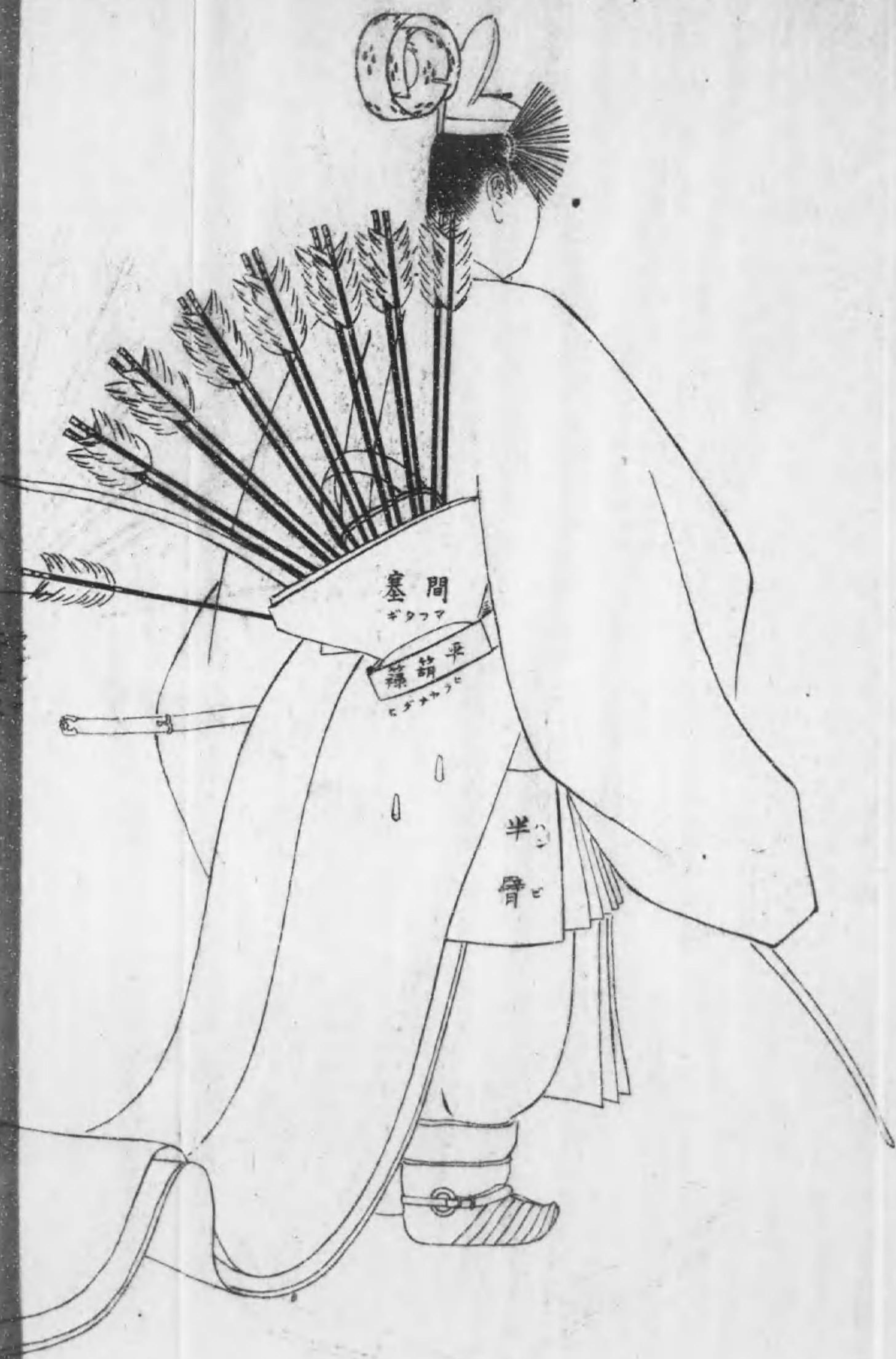
石帶
上手

石帶
平緒

魚袋









上差矢
ウエサヤヤ

塞間
ゴクッマ

平
シヤク

半骨
ハネボネ

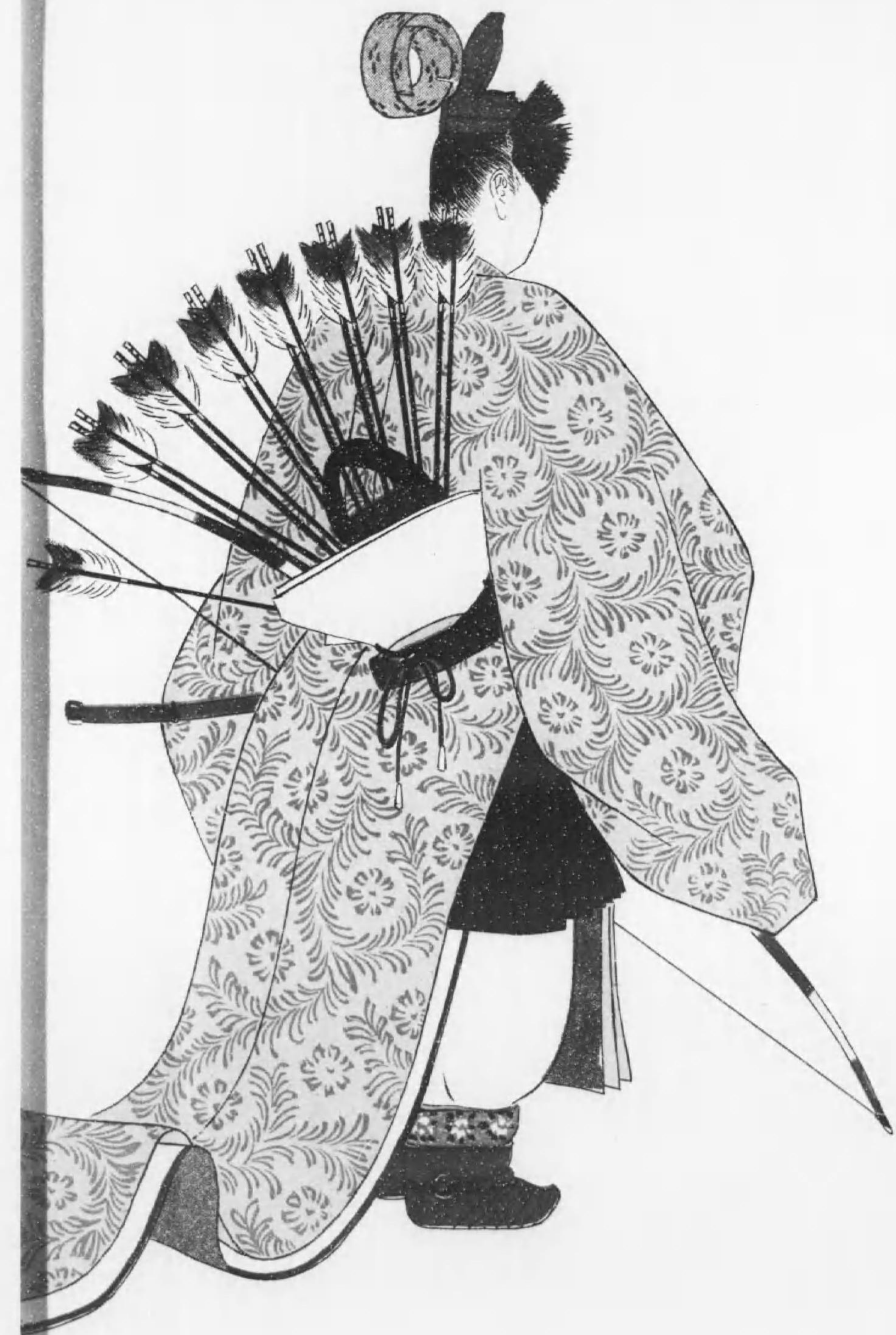
指帖
扇紙

絆

圓領

大領

單





特116
528

緒言

近來歴史及國語の教授が、單に文字の上に説明に止まらず、能ふ限りは實物標本等を示すことゝなりしより、歴史的服裝を作製することの必要を感じるに至れり。然るに其作製の法たる、古來有職故實家の調査はこれありと雖も、裁縫の事に至りては、僅に裝束師の間のみ傳はりて、坊間これを知るもの少し、況して之を書冊に載せたるものは、曾て見ざる所とす。本校は久しき以前より、是が教授をなしたりしが、今や世の要求により、これを編纂して、鉛槧に付することゝし、先其第一着手として、東帶及十二一重の部を發せり。然りと雖も、何等成書の據るべきものなく、全く新しき試

緒言

一

大正
2. 12. 9
内交

みなるを以て、苦心頗慘懣たるものありしと雖も、尙満足なるものたらざるは、吾人の竊に忸怩たる所なり、幸に大方の叱正を賜はるあらば幸これに過ぎざる也。

尙本書の編纂に就ては、斯道に精通せらるゝ長谷子爵閣下及邨田丹陵畫伯の指導と校閲とに待つところ多し、茲に附記してこれを陳謝す。

大正二年十一月

編者識す

裁縫
書 束帶の部目次

衣服の變遷	一頁
束帶の名義及沿革畧	二
襪	六
下袴	九
單	一三
表袴	一六
下襲	二五
裾	二九
縫腋袍	三一
半臂	三九

目次終

襦……………四三

縫腋袍著方順序……………四三

闕腋縫に用ふる半臂……………四四

忘緒……………四七

同下襲……………四八

闕腋袍……………五二

闕腋袍に用ふる表袴……………五七

闕腋袍著方順序……………五九

東京裁縫女學校出版部編纂

衣服の變遷

本邦に於ける太古の服制は、先下肢に禪ぜんを穿ち、上部に衣を被る、衣の長は短くして膝に至らず、袖は筒袖つつそでにして、衿かみは手頸てのくびを限とし、襟は左衽ひだりまてなりき、仲哀なかつら天皇の朝に至るまでは、殆本邦固有の服を著したるもの、如し、應神おうじん天皇の朝より、崇峻たかふみ天皇の朝まで、大凡三百二十餘年間は、本邦固有の服装に、外國の制を交へたるものを着用せり、推古すいこ天皇より、堀川ほりがわ天皇に至る、五百十餘年間は、支那しな隋ずい唐たうの制を斟酌しんさくしたるものを用ひしが、鳥羽とりば天皇に至りて、前代の服に基き、大に新意を加へ、剛こゝろ稜かどある服装を用ふるに至り、衣紋えもんの沙汰さたは此時よ

り始めりと云ふ。
衣紋の故實は、家々に其傳ありて、煩鎖なる制度、種々の變遷等もあり、山科高倉の兩家は、其御家なりと雖も、今其詳を盡さんは、本書の趣旨にあらざるを以て、唯其裁縫に就きて必要なるもののみを擧ぐるに止めん。

東帯の名義及沿革畧

東帯は即ち正服にして、大寶令に謂ゆる朝服に當り、王侯縉紳參朝の時を始め、公事大饗等、晴れの儀式には、必此服裝に冠を加へ用ひたるものなり、今其服裝の各個に就いて、大畧を左に述べん。

東帯の表衣を袍と稱し、文官の着用するは縫腋袍にして、中將以下武官の輩、節會、行幸等の際に着用するは闕腋袍なり、奈良朝の袍は、丈も等身にして短く、幅も狭く、袖口の廣さも

八寸以上、一尺乃至一尺二寸までなりしを、次第に華飾に流れ、平安の京に遷都以來は、身幅も廣く、袖口も廣くなり、特に鳥羽天皇の時に至りては、花園右大臣有仁公と相謀りて、裝束を華麗にし給ひ、一般に糊剛き衣を用ふるに至り、裝束の風全く一變せり。

半臂は、唐服を移し用ひられしものにて、袍と下襲との間に著すべきものなり、されども中古よりは畧して、半臂を著ざることもありと云ふ、忘緒は、左の腰の前通りに垂るゝなり、その結びやうにむづかしき故實ありと云ふ。

下襲は、半臂の下に著すべきものにて、後を甚長くし、袍の下に出だし、引きたるまゝに練り歩むなり、此長き裾は、又音讀してキヨとも云ふ、元は下襲の胴より引續きたるものなりしを、後に腰より以下を絶ち切りて、別にする事もあり、中古

服色の制弛びしより裾の長短によりて大臣・納言・參議等の階級を差別せり、村上天皇の頃は親王は袍の欄より出だす事一尺五寸、大臣一尺、納言八寸、參議六寸なりしと云ふ、其後一條天皇の時大臣七尺、納言六尺、參議五尺、四位、五位、四尺と定めらる、順徳天皇の時大臣一丈、大納言九尺、中納言八尺、參議散三位七尺、四位以下二尺、後堀河天皇の時に短くなりしが、其後又長くし、關白一丈二尺、大臣大將一丈以下、順徳天皇の時と同じかりしと云ふ。和は又袖とも書き下襲の下に著すべきもの、間籠の畧語ならむと云ふ。單は、袖の下に著すべきものにて、名稱の如く、裏なき衣なり、此單の下に夏は汗取を著たりしが、後世變じて大帷といふものになりたり。

表袴は、ウヘノハカマと讀むべし、白袴と稱するを本とす、大寶の衣服令には白袴と記せり。

大口の袴は、下袴にて公卿殿上人、地下の者に至るまで、東帯には、必著せしものなり。

石帯は、イシノオビとも讀み、縫腋、闕腋の別なく、東帯の時著用する革製の帯なり、石玉の類を飾りとして附くるを以て、石帯とは謂ふなり、又魚の形を作りつけたる魚袋と云ふものありて、節會、大嘗會などの式日には石帯に掛け右の腰に下げたりと云ふ、平緒は、元太刀の紐にて、平たく組みたる緒なり、近世多く色糸を以て種々の模様を刺繡し、太刀の紐とは別にして、前に垂るるなり。

飾太刀は、東帯の時に佩用するものにして、鞘を紫檀などに作り、又は蒔繪にして、金銀青貝などにて飾れるを云ふ。

笏しやくは、中古より禮服には牙笏げしやく、束帶には木笏もくしやくと定められたり
 長さ一尺六寸幅三寸厚五分なり、寸法にも形にも聊相違の
 ものもありと云ふ。

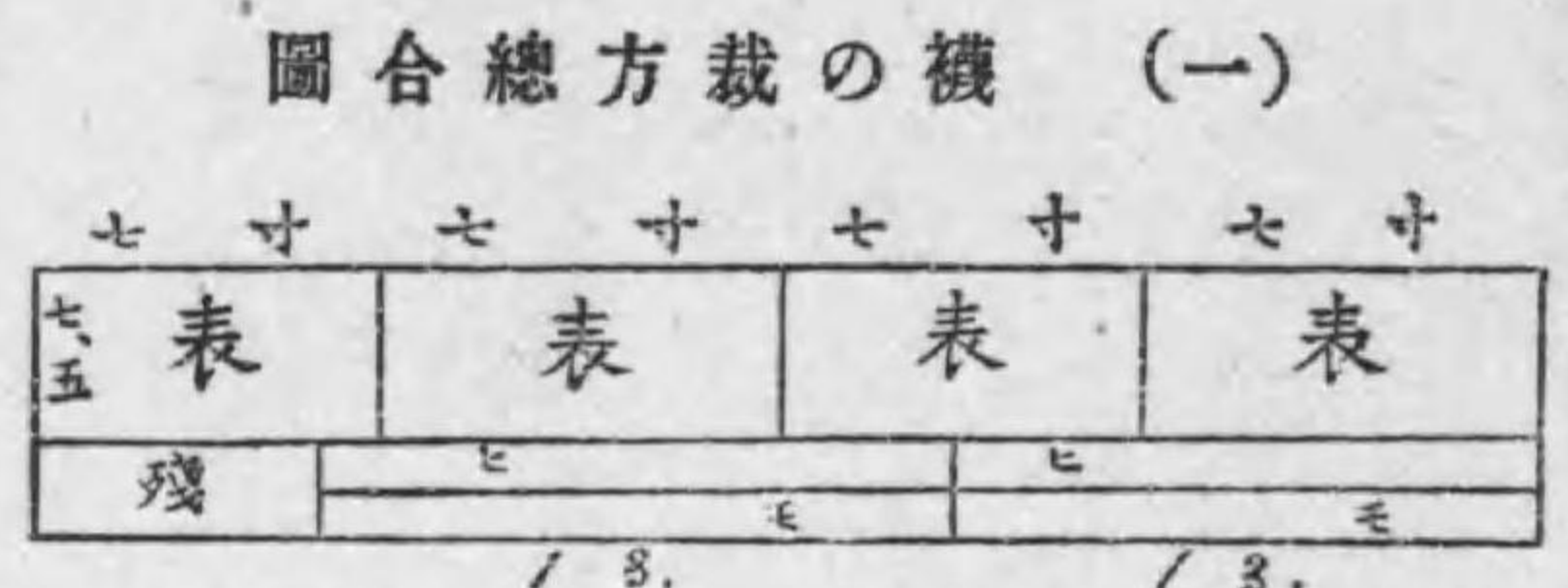
襪はシタウツと訓む、下沓げくわ(足袋)の義なり、束帶の時には必こ
 れを用ふ、束帶ならざる時は、聽きるされたるものの外は著用ちやくよう
 せず、儀式ぎしきの時に用ふる沓は、下の方を革にて作り、上部は蓄たく
 薇錦びきんとして、ばらの花を織りたる錦を附く、又沓帶として、革の細
 きに金具を付けて停むる様にす、通例は淺沓あさくわなりとぞ。

詳細なる制度變遷等に就ては、専門の書ありと雖、濶濶なるもの多ければ、
 關根文學博士の増補裝束圖解を參考するを便とす。

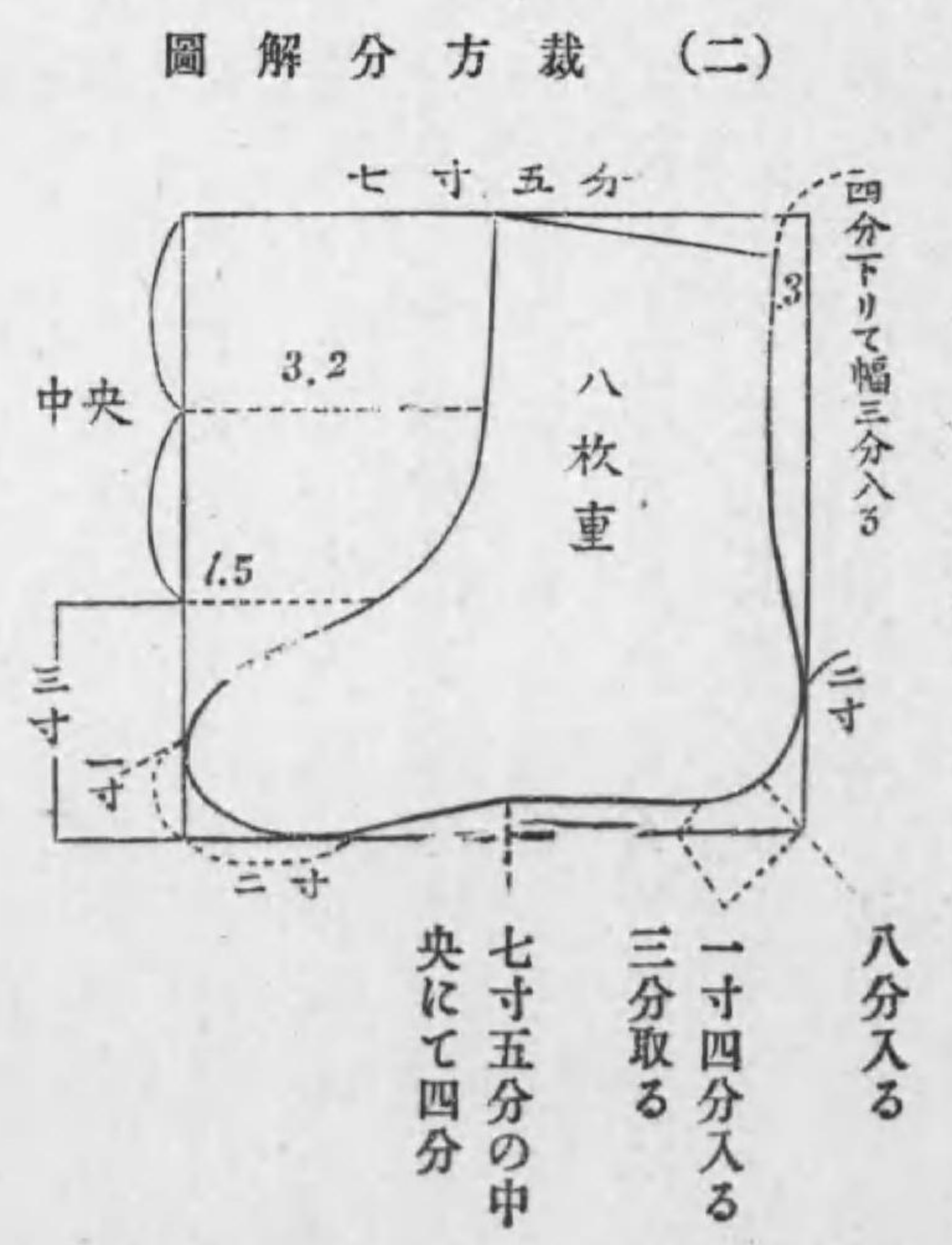
襪

地質 裏表共白平絹即白羽二重を用ふ。
 用布 常幅にて二尺八寸を要す。

裁方 圖に就いて見るべし。



(すせ要を紐但)じ同に表は方裁の裏




縫方 (二)紐幅を上り三分にし、一方の端は縫ひ一方の端は裁目の

まゝにて紵ける。

- (二)右足の縫方は、内甲即ち一つになる布を裏表揃へ、後中央にて馬乗を、上部の縫代を取りて、五分下りし所より縫ひ始め、次に上部の横、即ち口を縫ひ、其糸にて前中央を上部より三寸下りし所まで馬乗を縫ひ、折は裏布の方に返す。
- (三)四つ即ち外甲の裏表の布にて一つを挟み、前馬乗止りにて四枚ともに糸止をなし、其糸にて指先の方に縫ひ廻し、底の中央にては裏布一枚残し、三枚にて縫ひ、それより先は又四つ縫ひにして後、中央の馬乗止りまで四つ縫ひにし、此所にて一針糸止めをなし、其糸を切らずに、上部の横と前馬乗三寸の間を縫ひ、次に引き返し表を出し、次に底の中央にて、裏一枚縫ひ残しし所を紵け付くるなり。
- (四)四つの方に穴を開く、其開け方は、後中央の縫目より幅八

分入り、上部より一寸下りて豎に開け、穴紐をなす。

- (五)紐を附く、前の上部より五分下り、幅七分入りたる所に、紐の先を當て、紵目を下に向け、紐の裁目の方を、縫代だけ裏に折返し、丈三分程の間にて  の如く綴ぢ付くるなり、左の縫ひ方も右に同じ。

下袴シタのハカマ

地質 表裏共紅色の平絹なり(但上等なるは、緋の精好、裏は紅の平絹を用ふることあり) 地は装束地なれば、幅は一尺二寸以上一尺六寸のものもあり。

裁方 圖に就いて見るべし。

縫方

- (一)角襠かくまてを裏表共出し、一方を縫ひ合せ、折は裏布の方に返し、此所を右前襠と定め置く。

圖方裁袴下

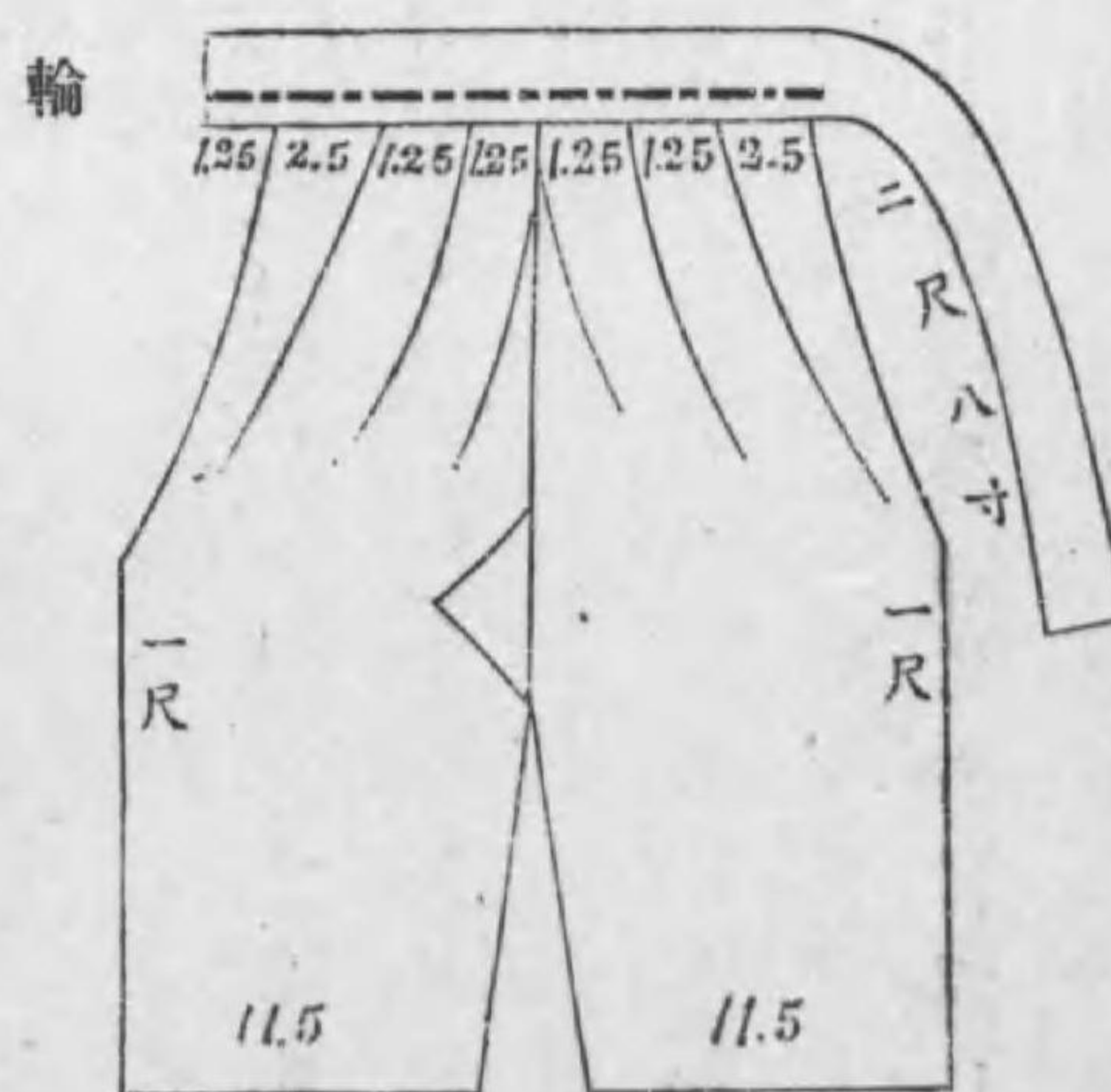
	6.	25.	25.	25.	25.
マ チ リ	布	前	後	後	

寸六尺六さ長幅半に別てに布同は紐

積方 $25. \times 4 + 6. = 106.$ 表用布
方 裁 裏

	6.	24.5	24.5	24.5	24.5
マ チ リ	前	前	後	後	

積方 $24.5 \times 4 + 6 = 104.$ 裏用布
圖り上來出袴下
前



- (一)前後左右共、裏表の裾口を縫ひ合せ、折は裏布の方に返し、表布を裏に丈二分折り返し置く。
- (二)後布の上より一尺三寸下りし所より下に、角襠を左右共後布にて挟み、四つ縫ひにして縫ひ付け置く。

(四)右後にて左後を挟み、上部より一尺三寸の間を四つ縫ひにす。

(五)後の投を裾口より相引高さを一尺残し、それより上布丈のある所までを、表裏縫ひ合せ、折は裏へ返す、但し縫代表二分五厘裏三分五厘にし、表布を裏へ五厘折返す。

(六)右前布を出し、前布にて後布を挟み、内股を裾口より四つ縫ひにし、襠の裾口にて糸止をなし、其糸を切らずに、襠の大ききさだけは、前布の裏表だけを縫ひ合せ、折は裏へ返す。

(七)左前布の裏表にて後襠を挟み、内膀の所を裾口より角襠の縫ひ付けある所まで縫ひ、一針糸止をなし、其糸にて前布にて角襠を挟みて、襠丈のある所まで縫ひ、其所にても左右の前布と襠とに針を通のて糸止をなし、其糸を切らずに、前懷を左前布にて、右前布を挟み、布丈の終りまで縫

ふ。

(八)左右の相引を縫ふには前布にて後布を挟み、裾口より縫ひ始め、相引高さの止りまで縫ひ、其所にて一針糸止をなし、其糸を切らずに、前笹襷の所を後の投を縫ひたる如く縫ふ。

(九)襷を取るには、懐三寸五分、笹襷幅二寸五分にし、中襷は懐と笹襷の中央に取り、寄襷幅を一寸二分五厘づつにし、中央即懐は突き合せて襷を取り、腰幅を一尺にし、寄襷は相引止にて消ゆる様にす、但し前後共同様なり。

(十)紐の付け方 前左脇にて、腰幅止より先に紐丈二尺八寸を出し置き、右脇まで縫ひ付け、それより先に紐丈二寸五分を取り、其所と後右腰幅の止りとを揃へ、左腰幅止りまで紐を縫ひ付け、紐丈の残りは、左後脇に出し置く(但し腰

の所には厚紙を心に入る)。

(十一)腰飾の付け方 前後の腰幅に二目落しにして、大針を四針づつ出し、右脇の紐丈二寸五分の所に、大針一針を出して、飾縫をなし、次に紐を裏にて拵け、次に相引止りに門止をなす(但し腰の飾糸は白太白二本にてなす)。

單

地質 裝束地にて、色は赤、無紋と有紋と有り、有紋は重に遠菱の模様を織出す。

裁方 圖に就いて見るべし。

裁切寸法

袖	二尺〇五分	後丈	二尺一寸五分
前丈	二尺三寸五分	衿肩	二寸七分
衿丈	二尺一寸	衿幅	七寸
衿下	二寸五分	衿丈	三尺二寸五分
衿幅	五寸		

單

仕立上寸法

袖丈	二尺
身丈	前後二尺一寸
衿幅	一尺一寸
衿下	五寸
衿幅	三寸

袖幅	一杯
身幅	前後共一杯
衿下	三寸
袖付	前後の裾下を揃へて前三寸後七寸
衿丈	衿山にて二寸斜に長く出す

縫方

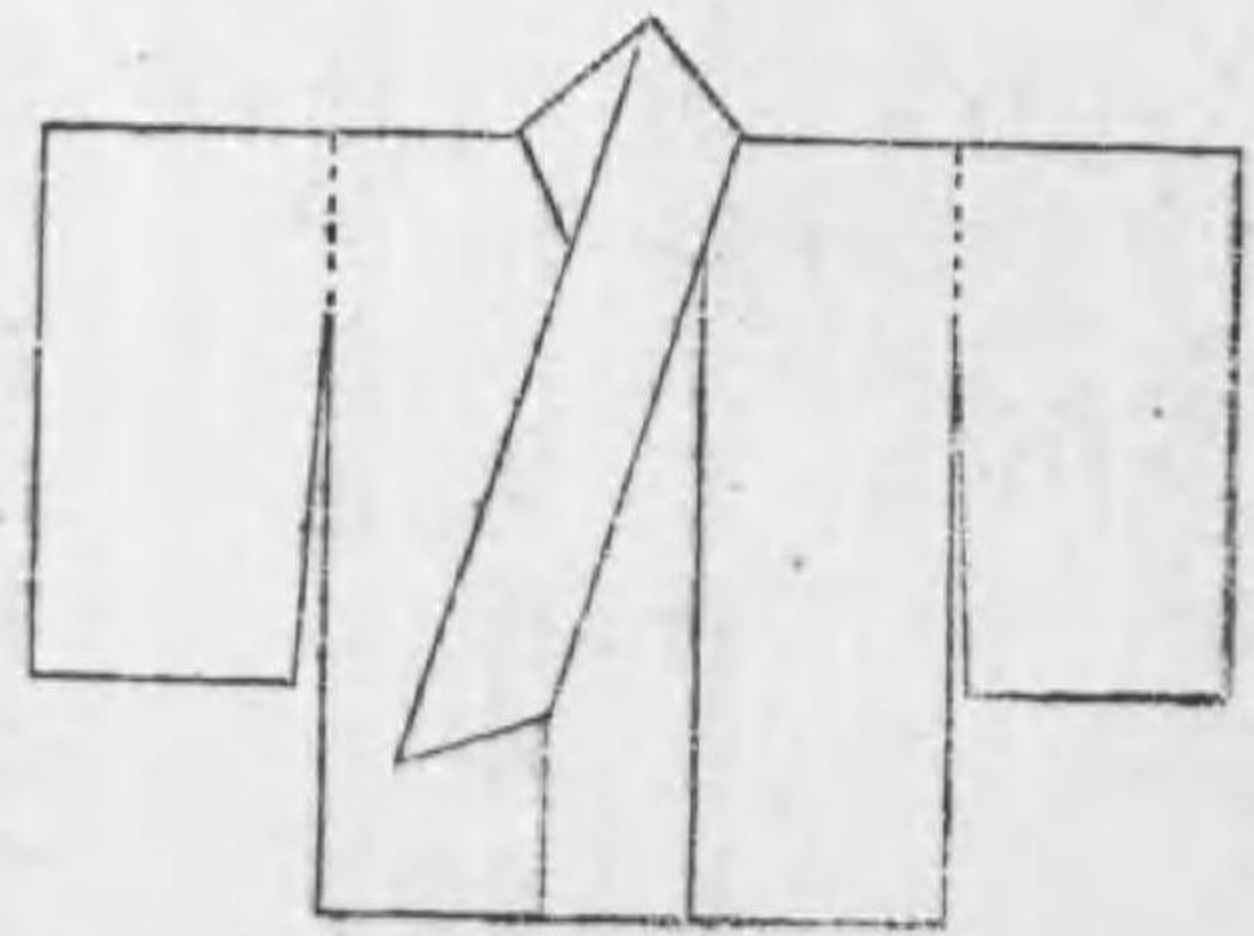
- (1) 左右の袖口とハツ口とを細く捻糸にす。
- (2) 後袖下を丈一分五厘程、布の表に折り返し、其所に前袖下を挟みて、袖下を縫ひ、折は前の方へ返す。
- (3) 衿を出し、衿下と裾口とを捻糸にす。
- (4) 身頃を出し、兩脇を袖付標より、裾口まで、捻糸にす。
- (5) 裾口を前後共捻糸にす。
- (6) 背を縫ひ、折は普通服の如く返す。

單の裁方圖

用布幅一尺二寸長二丈二尺六寸五分

袖	袖	前	後	後	前	手	工	リ
						衿	衿	衿

單の出來上り圖



- (7) 前幅標をなす。
- (8) 衿の身頃に付く方の縫込の端を、幅一分程、布の表に折り返し、衿の縫込の中へ、前身頃の縫込を入れ、衿にて前身を

挟みて、左右の衽を、付け折は衽の方へ返す。

(9) 衽を出し、衽幅の山になる方を捻紵にし、次に衽先を二寸斜にし、其所も捻紵にし、次に衽幅標をなす。

(10) 衽幅標より先、縫込の端を、幅一分布の表は折り返し、衽の縫込にて、衽を挟みて、衽を付け、折は衽の方に返す。

(11) 袖を付け、折は袖の方へ返す。

(12) 著する時、衽の折り方、上前衽下り止より、下前衽下りまで幅一寸三四分に、眞直に折を付け、其折目を捻紵の所まで持ち行き、衽幅を一寸五分にし、三つ折にし、内より二目落しに縫ひ置くなり。

表袴

地質 表は白綾、白平絹等にて、有紋と無紋とあり、裏は紅の平絹を用ふ。

裁方 圖に就いて見るべし。

表の裁切寸法

幅一尺二寸、丈二尺五寸(四枚)

襠幅四寸、丈三尺一寸(二枚)

紐幅四寸、丈六尺五寸(一本)

裏の裁切寸法

幅一尺二寸、丈二尺五寸五分(四枚)

襠幅四寸五分、丈三尺一寸(二枚)

紐幅四寸五分、丈七尺(一本)

仕立上寸法

紐下一杯にて前後共同様

相引の高さは衽を除きて六寸(襠幅^緋裏^{二寸}白^表一寸五分)

衽二分、笹襷二寸、寄襷二寸(紐幅^緋裏^{二寸}白^表一寸五分)

縫方

(一) 前後左右の裾口を、裏表縫ひ合せ、折は表の方へ返し、裏布を表へ二分ふかせ置く。

圖方裁の袴表

方裁の表

ヨ	マチ	マチ	布	前	布	後
	ヒ	モ				
	ノ	コ				

寸五尺六丈寸四幅紐寸四幅襠

方裁の裏

ヨ	マチ	マチ	布	前	布	後
	ヒ	モ				
	ノ	コ				

尺七丈分五寸四幅紐分五寸四幅襠

て縫ひ、折は前布の方へ返す。

(四) 襷の取り方、前は左右共同じにて、懷を表の縫目より三寸五分の所に折を付け、其折山を表の縫目より三分離れし

(二) 相引標をなし、それより上裏表縫ひ合せ、折は表へ返し、裏布を表へ二分フカセ置くなり、故に縫ひ合す時、表を六分裏を二分の縫代にす、但し前後左右共兩端を斜に縫ふ。

(三) 相引及び内胯を縫ふ、其縫方は、裏の表へ縫目の出づる様にし、前後の布を揃へ

所に持ち行き、次に笹襷幅を二寸にし、寄襷幅も二寸にし相引止にて消ゆる様取るなり。

(五) 右後襷は懷三寸にし、其折山を表の縫目より三分離れし所に持ち行き、笹襷と寄襷とを二寸にす。

(六) 左後は懷を四寸にし、其折山を表の縫目より三分離れし所まで持ち行き、笹襷と寄襷を二寸づつにして取る。

(七) 襠及び紐とを紵ける仕方は、表布(白)を幅一寸五分上りにし、兩端を裁目のまゝになし置きて、端まで紵ける、但し紐の兩端は縫ふなり。

(八) 裏襠即紵の方は、幅上り二寸にし、兩端を裁目のまゝになし置き、端より端まで紵ける。

(九) 裏表の襠を身に縫ひ付く、其仕方は、紵の襠の上に白の襠を乗せ、紵の紵目と白の輪とを合せ、幅の中央を揃へ、右後

の懐の所に、上より三寸下りし所まで、裏の表に縫目を出して、残らず共に縫ひ付け、折は襠の方へ返し、其襠を平にして、左前布の内胯即懐の所にて、上より三寸下りたる所まで、後と同様に縫ふなり。

(十)左後布にも、右の如く裏表の襠を、丈三寸の間縫ひ付け、其襠を右前布に縫ひ付くるなり。

(十一)襠を縫ひ付けたる左右の布を取り、右後布を上、左後布を下にして、襠の幅だけ重ね、躰を掛け置き、前は襠と襠とを離し置くなり。

(十二)紐を身に縫ひ付くる方法は、始裏紐(即ち緋)を左前幅止より、先に一尺五寸出し置きて、前腰に縫ひ付け、右の脇に紐丈三寸残り、其三寸の止りと、後布の右脇とを合せて、左後脇まで縫ひ、此所にて、右脇と同様紐丈三寸残り、其所

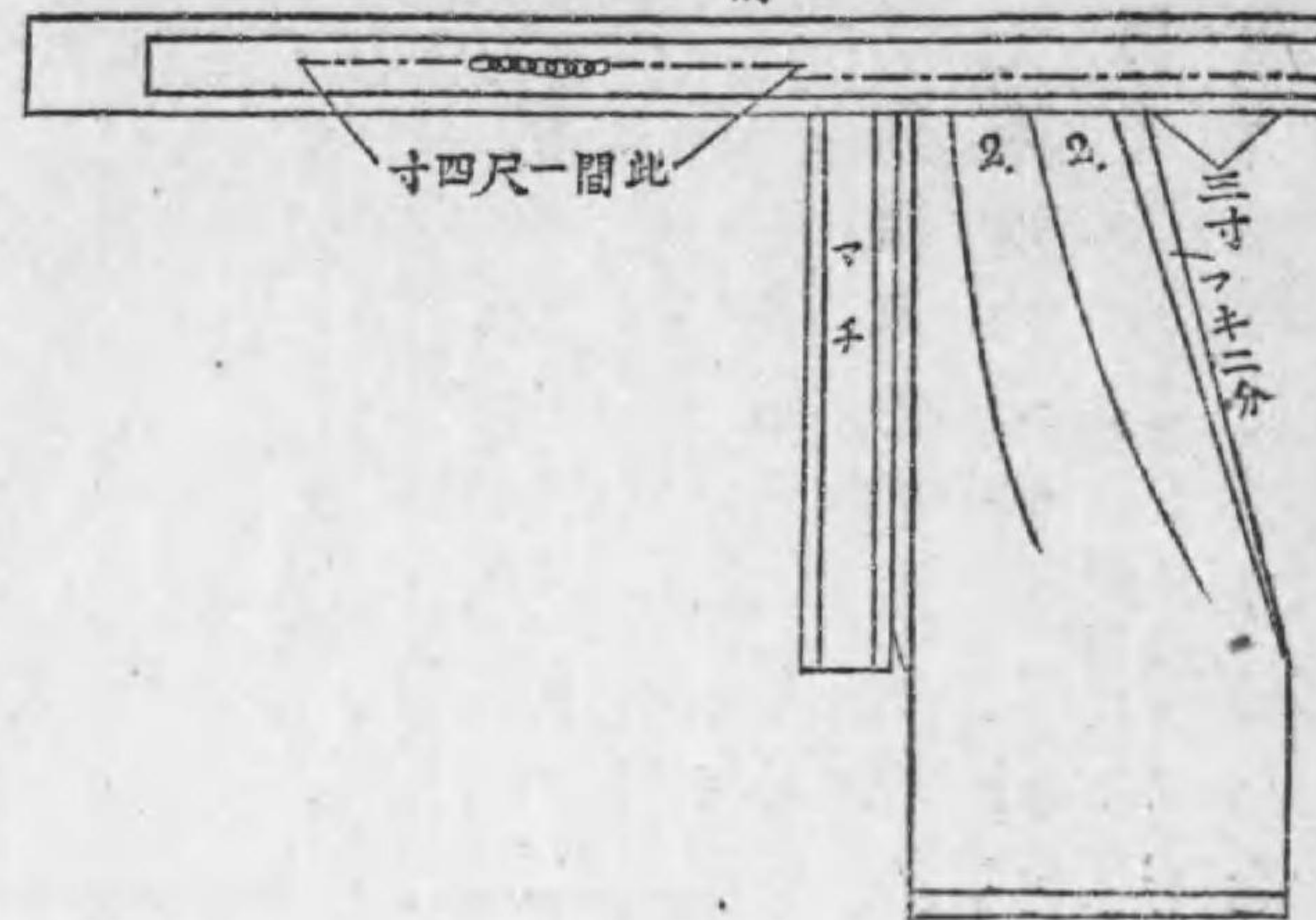
と左前脇とを合せて、前幅の終りまで縫ひ付け、折は紐の方へ返す、但し此紐を縫ひ付けたる所には、厚紙を心に入るるなり。

(十三)緋の紐幅を、上り二寸に標を付け、次に右前の裏紐の先より、丈三寸入りたる所と、表紐の先とを揃へ、裏表の紐幅の中央と合せ、緋の上に白を乗す、假に躰糸にて縫ひ付け置きて、飾縫をなす。

(十四)紐の飾縫は、白の太白糸の左撚一本と右撚一本とにて、表紐(白)の紘目より幅二分程上りし所にて、右前腰幅に二目落にして、大針を三針出し、脇の紐丈三寸の間に、大針一針を出し、後腰幅には、左右にて大針五針出し、左脇紐丈三寸の間に、大針一針出し、左前幅に大針三針出し、残らずにて大針を十三針出して、飾縫をなし、次に裏紐(緋)の両端を

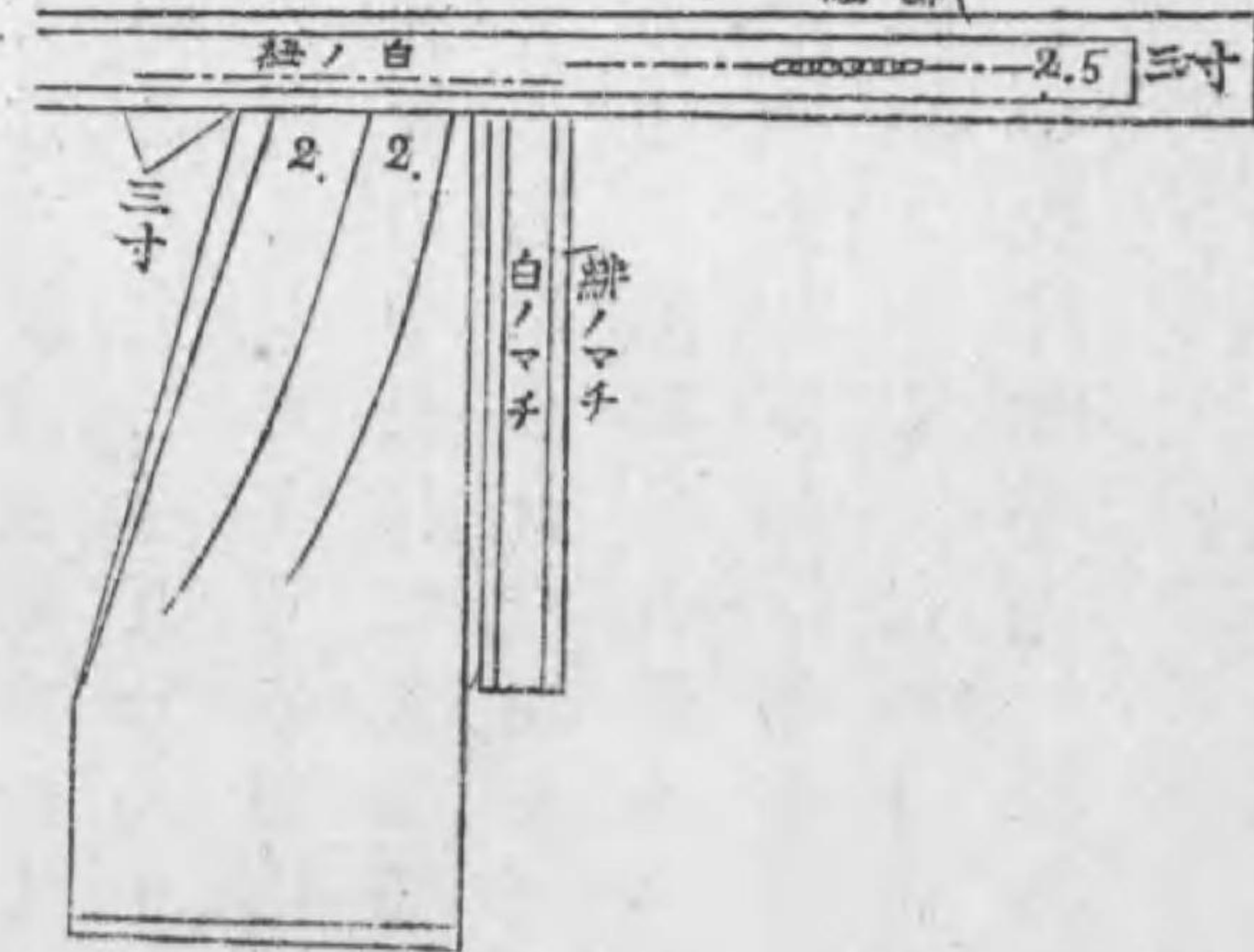
紐の飾の縫の圖

左ノ前



表袴

右ノ前 紐の飾



二三

裳の取り方

右後



襷

左前



襷

縫ひ、引き返し、裏にて拵け付くるなり。

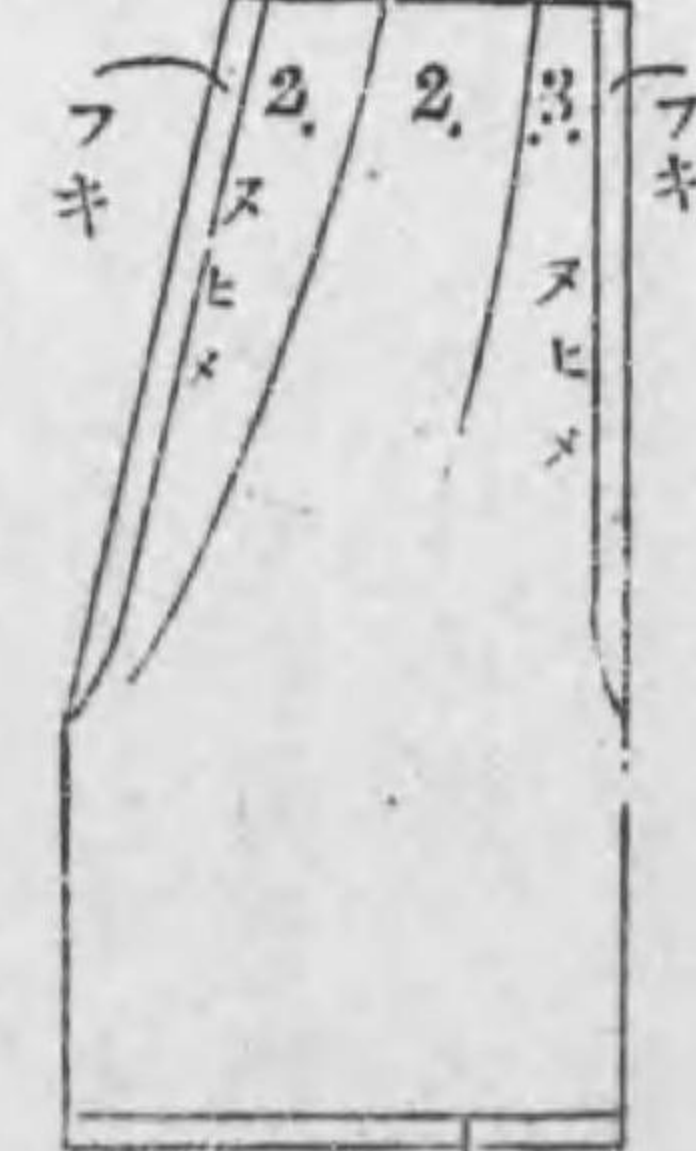
表袴

右前



襷

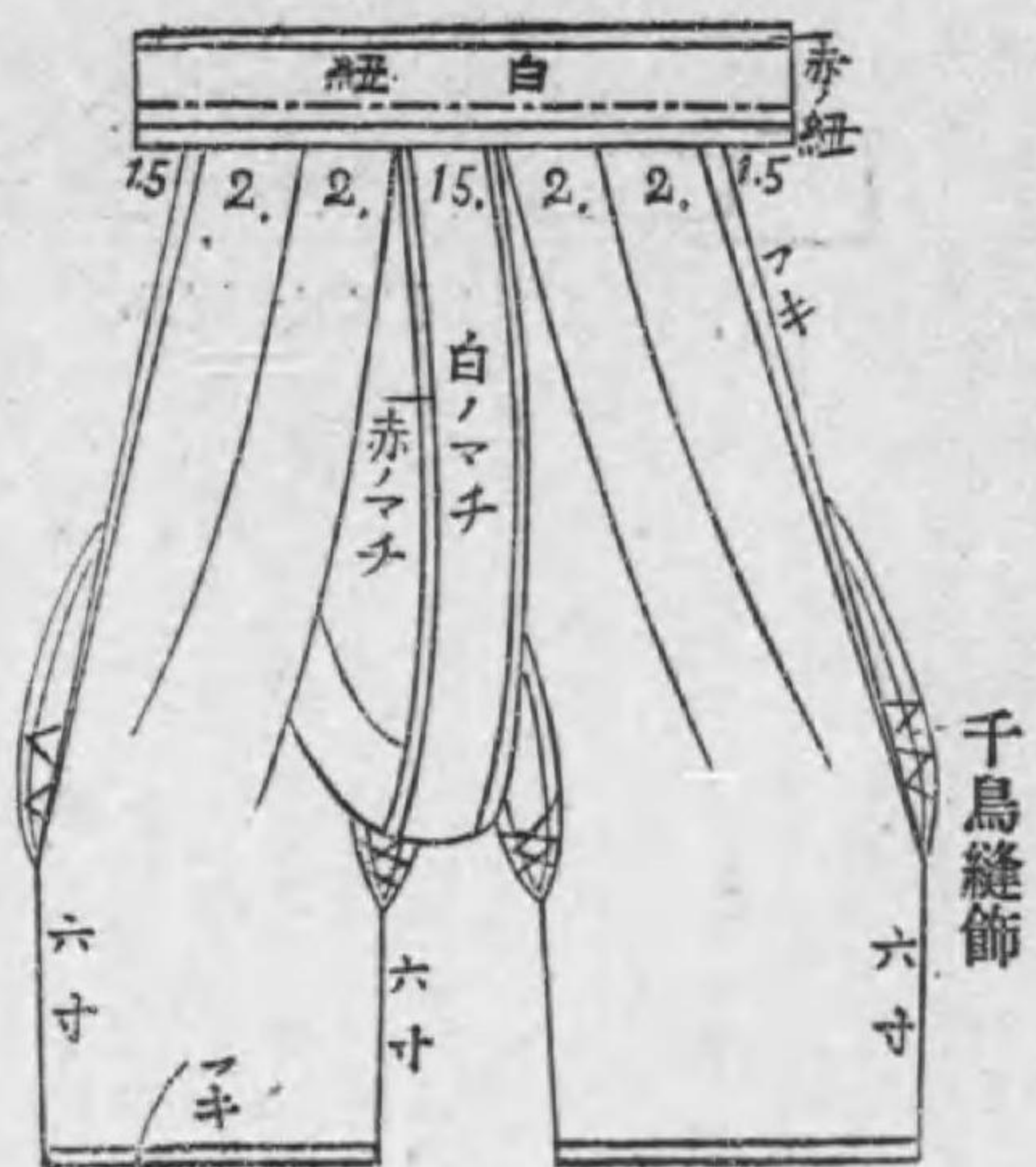
左後



襷

二三

表袴の出来上り図



(十五)紐に又飾縫をなす、其仕

方は、右前は表紐(白)の丈の

先より、丈二寸五分入りた

る所より、丈九寸の間にて、

紐幅の中央にて、裏紐(緋)の

裏の表に小針を出して、圖

の如く、両端に大針を一針

づつ出し、其間に輪を七つ

造り(鎖編みの如く)次に左は前幅止より丈一尺四寸の間

にて、両端に大針を二針づつ出し、中央に輪を七つ造りて、

飾縫をなす(但し鎖編みなく全部二目)。

(十六)相引止りに、千鳥縫ひをなす、其仕方は前後左右共相引

止より二寸五分上りし所までに、白太白二本にて千鳥縫

を三針づつなすなり(但し内勝にもなす)。

下襲

地質 冬は表白、浮線綾にして、紋は臥蝶、裏は黒、紋は菱の類、

夏は穀織有紋の單、四位以下は、冬は表白、裏黒の平絹、夏は

無紋の穀、或は生の平絹にて、色二藍とす。

仕立方 單と袷とあり、單の時は大帷子の如く、總て捻紵に

す。

裁方 圖に就いて見るべし。

裁切寸法

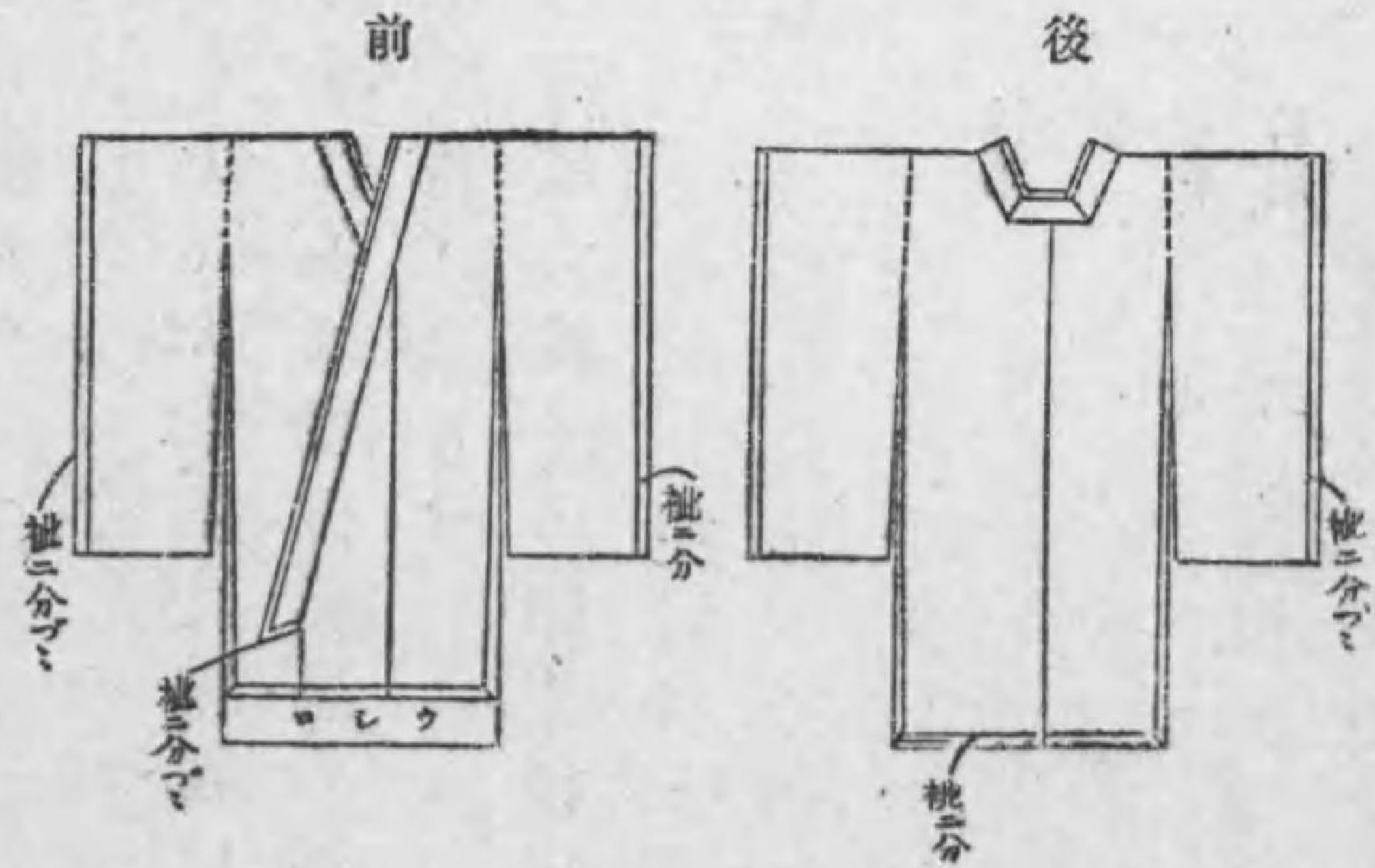
袖丈	二尺八分	袖幅	一尺二寸
後身丈	二尺四寸	前	二尺九寸
衽丈	二尺六寸	衽幅	七寸
衽丈	五尺六寸	衽肩	二寸七分
衽幅	五寸		

圖 方 裁 襦 下

方裁襦下にて布の寸二尺四丈二さ長寸二尺一幅
(けだ衿と頃身し但)すく長けだ倍二の襦りよ表方裁の裏

リ	エ	キ	前	後	後	前	袖	袖
ノ	ヒ	社	ニ	ニ	ニ	ニ		
コ	サ		モ	モ	モ	モ		
リ	サ							
2.5	2.6	2.9	2.4	2.4	2.9	4.6	4.6	

圖 り 上 來 出 襦 下



仕 立 上 寸 法

袖丈一尺九寸五分 袖幅一杯 口廣袖 袖付は前を後へ三寸五分繰越し、其所を山にして前二寸後九寸五分付く 身丈後二尺三寸五分前二尺七寸五分 身幅一杯 衿幅六寸 衿下り三寸五分 衿幅三寸にて衿先丈一寸長くす 襦袖口、裾口、衿幅山、衿先及身頃の脇二分づつ出す

縫 方

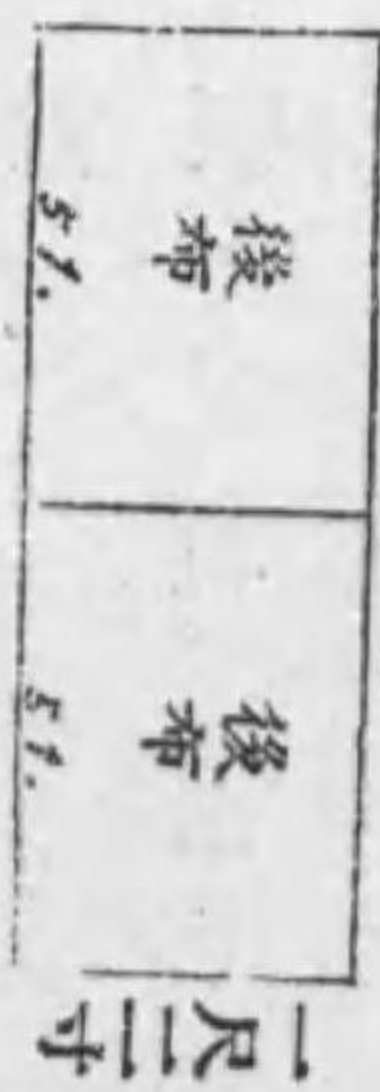
- (一)裏表の袖を出し、布の表を中にして、二枚重ね、袖口になす方を、布丈の端より端まで縫ひ、折は表へ返し、裏布を表へ幅二分折返して、襦を定め、襦を掛け、次に袖幅標をなす。
- (二)八つ口を普通衿の如く縫ひ、折は裏へ返す。
- (三)袖下を四つ縫にす。
- (四)身頃を出し、裏表別々に脊を縫ひ、折は普通の著物の如く返し、後幅と肩幅標をなす(但し表は幅四分狭くす)。

- (五)前後の裾口及び左右前後の脇を、袖附標まで、裏表縫ひ合せ、折りは表へ返し、裏を表へ二分折返して、躰を掛け置く、但し角の所は斜にす。
- (六)袖を普通の袷の如くに附くるなり。
- (七)前幅を裾口にて一杯にし、衿肩止より斜に衿を付くる標をなす。
- (八)裏表の衿を出し、裾口を縫ひ合せ、折は表へ返し、裏布を二分表へ折返す。
- (九)衿を四つ縫ひにす。
- (十)衿下を毛抜合せに縫ふ。
- (十一)裏表の衿を出し、普通の袷の如く四つ縫ひにす(但し此時衿下止りより先に、衿丈を一寸三分程長く出し置く)
- (十二)衿幅を表三寸裏三寸四分に標を附け、衿先は單の如く

一寸斜になる様、裏表共標を付け、裏は衾の二倍だけ長く標を附けて、衿先と衿幅の山とを紘けるなり(但し著する時、衿幅を大帷子の如く折るなり。)

地質 色相模様等、皆下襲に同じ、元來下襲の後部なりしこと前に謂へる如し、然るに近古以來、腰の部より、上と下とを切り離して、上を下襲と云ひ、下を裾と云ふ。

裁方 圖に就いて見るべし。



表の裁方 幅一尺二寸にて、長さ五尺一寸を二枚、外に紐は同布にて、別に半幅長さ五尺のもの一枚を要す。
裏の裁方 幅一尺二寸にて、長さ表より衾二分の二倍長さ

もの二枚を要す(但し紐は要せず)。

縫方

(一)表布を二枚合せて縫ひ、折は著物の脊と同様に返し、次に幅上り一尺一寸に標をなし置く。

(二)裏布も二枚合せて縫ひ、折は表と反対に返し、次に幅を表より裾の二倍即四分廣く標をなし置く。

圖り上來出の裾



(三)裏表の幅標を合せて、兩脇と裾口とを縫ひ、折は表へ返し、裾二分出し、躰を掛け置く(但し裾口の兩端は裏布を裾の所だけ斜にす)。

(四)投を上より九寸と定め、

腰幅を紐を附くる時の縫代を取りて、左右にて八寸と定め、腰幅標より投の所まで、斜に標を付け、其標通り裏へ折り返し、折り返したる上部の裁目の所は、裏表毛抜合せにして縫ひ、其角の所にて、表へ一針出して綴ぢ付け、裏にて糸と糸とを結び置くなり。

(五)紐幅上り一寸七八分、丈一杯にし、丈の中央を一尺拵け残り、兩端を拵け置く。

(六)紐には女袴の如く厚紙を入れ、白の太白糸にて、大針五つ針出して飾縫をなす。

(七)紐を縫ひ付け、裏にて拵けるなり。

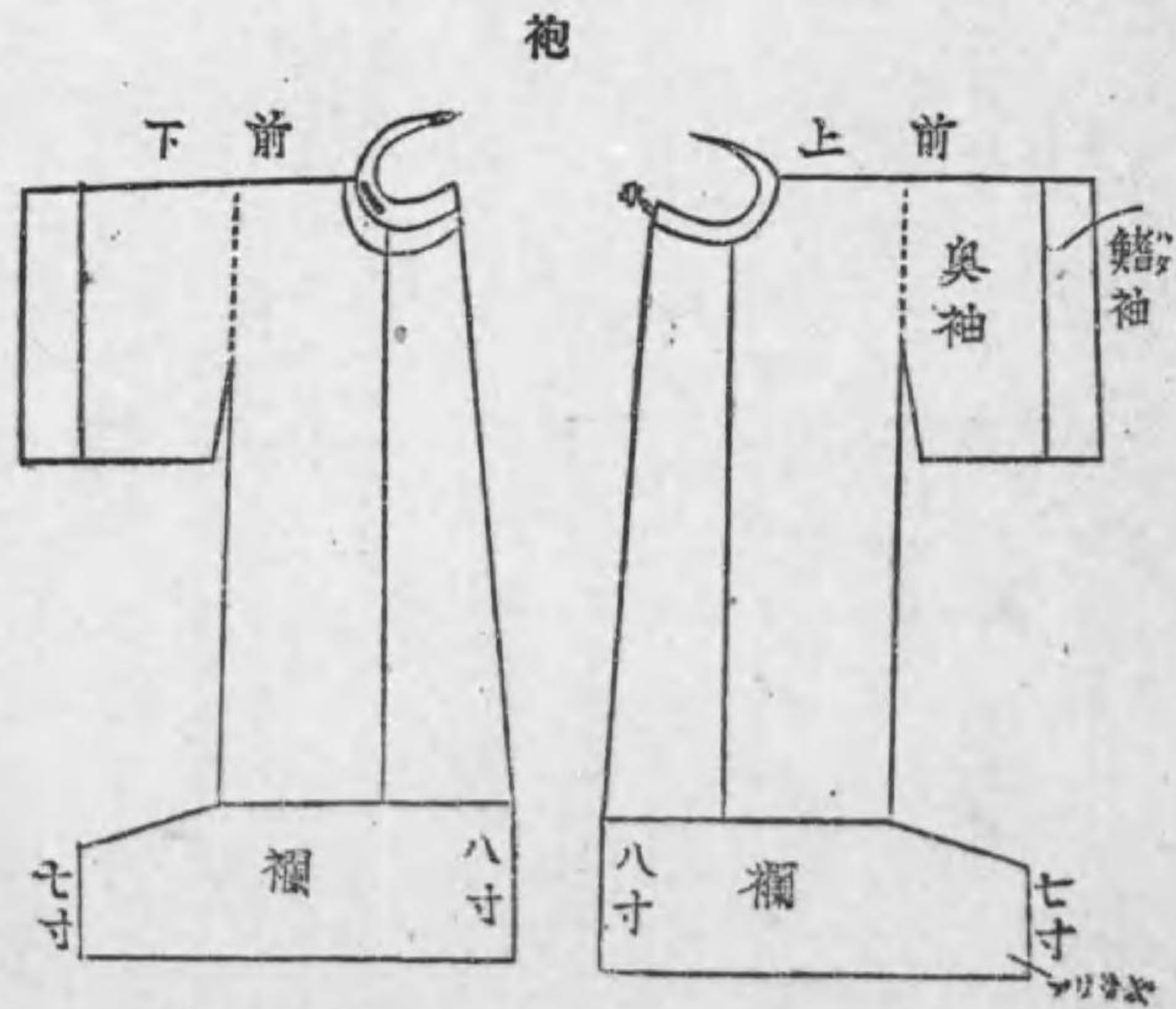
縫腋胞

地質 色相は最初一位深紫、二位三位淺紫、四位深緋、五位淺緋、六位深綠、七位淺綠、八位深縹(縹は今の花色なり)無位黃

圖方裁の袍



置しなにいまの幅を襷は所るな異と表方裁の裏
(色同と表は色の裏)りなみのく



好共後前は昔けだき長の丈身はしけ附をエコハ
袋に途をいしなく如のリヨシハオげ上引に程き
也るぐ上引てに帯みの前け附ち綴てり折く如の

袍との定めなりしが、一條天皇の時より、四位以上皆黒、五位赤色、六位以下縹となりしと云ふ。
地質は、冬は表綾、裏平絹、夏は穀織を用ふ、但し六位以下は、夏冬共無紋の穀織を用ふ。
地紋 別に定まり居らざれども、昔は雲鶴藻堅食の模様多く、其外轡唐草、輪有輪無、輪違等が普通なりしと云ふ、四位以下は普通輪無なり、其後家々の紋を定めて著せらる、其紋は、雲立涌、雲鶴、浮線綾、龍膽等なり。

裁方 圖に就きて見るべし。

裁切寸法

- 袖丈 二尺〇五分
- 堅衿(大) 丈三尺九寸
- 堅衿(頸) 五分
- 衿肩 三寸、頸三寸
- 袖幅 一布半
- 堅衿幅裾口 六寸五分、上四寸五分
- 身丈 四尺一寸五分
- 襷幅 八寸五分、丈八尺

小衿(圓領即く) 丈二尺二寸
仕立上寸法

紐丈 一尺二寸五分を二本

袖丈 二尺

袖幅(襟袖) 五寸

奥袖 一尺

袖口廣袖 袖付後八寸、前一尺二寸

袖下の縫目を後へ七寸繰越す

身丈 三寸

一尺九寸五分

身丈 一尺

身幅前後共一尺

堅衿幅裾口にて六寸

全上 三寸二分

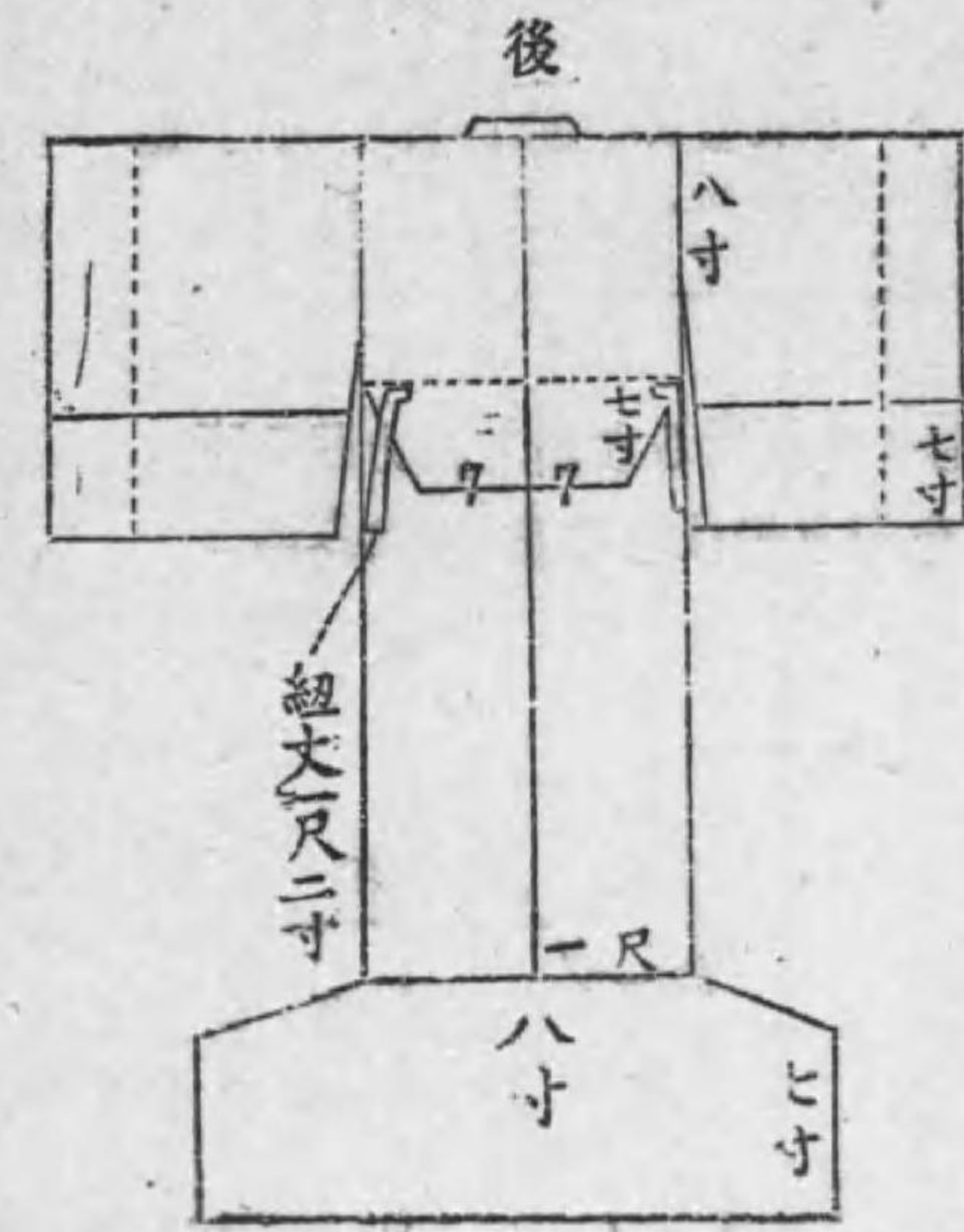
小衿 丈二尺一寸

幅 七分

襖一杯幅 八寸

紐幅五分 丈一尺二寸

圖り上來出



縫方(衿)

(一)裏表の襟袖(口先布)の口先になる方を縫ひ合せ、折は裏袖の方へ返し、表を裏へ幅二分折返し、次に幅標をなして、袖下を四つ縫にす。

(二)奥袖の裏表を出し、袖下を四つ縫にす。

(三)奥袖と襟袖とを縫ひ合せ、折は襟袖の方へ返す、但し裏の表へ縫目を出し、襟袖は幅標の所を縫ひ、奥袖は普通の縫代にし、奥袖の幅標をなし、其所より裏の表へ折返し、奥袖幅の縫ひ込みを、單衣振り八つの如く綴ぢ付け置く。

(四)裏表の身頃を出し、脊を四つ縫にし、次に後幅標をなす。

(五)三つ衿の所にて、小衿を付くる時の縫代を取り、それより丈一尺二寸下りたる所にて、後身頃のみを括みて、丈七寸の揚をなす、其仕方は三つ衿の縫代を取りたる所より、丈一尺九寸下りし所を揚の山にし、其所にて脊縫より左右

へ幅七寸の所に、標をなし、一尺二寸下りし所を後幅標まで斜に標を付け、其標通り裏の表に針目を出して、兩脇の所を縫ひ置く。

(六)脇を縫ふには、裏の表に縫目を出して、裾口にて前後の身丈を揃へ、身八つ口の所まで縫ひ、折は前へ返す。

(七)豎衿の裏表を出し、身頃に縫ひ付けぬ方(丈の長き方)を、裏表縫ひ合せ、折は裏へ返し、表を裏へ幅二分折り返し置き、て、豎衿幅標をなす。

(八)前幅標をなして豎衿を縫ひ付く、其仕方は裏の表に縫目を出して、裾口より四つ縫にし、折は豎衿の方へ返す。

(九)下前豎衿上の幅を五分取り、丈二寸の間にて斜に裏へ折返し置く。

(十)小衿には厚紙又は布を心に入れ、捻糸にて返縫にし、下前


豎衿幅を五分裏へ折り返せし折山より付け始め、上前豎衿幅の止りまで縫ひ付け、折は小衿の方へ返し、次に小衿幅標をなし置く。

(十一)同布を細く捻糸にし、其紐にて蜻蜒結(シヤカ)を一個造り、是を上前衿先の衿山に當て、裏表の衿にて挟み(シヤカの丈一寸出す)衿先を縫ひ、次に下前衿先も縫ひ、折は裏衿の方へ返し、次に裏へ小針に紵(入紐として最初くびかみを通して紐を入れしと云ふ)付け付く。

(十二)同布を細く捻り、丈二寸にし、先の方へ丈五六分の間輪になし、それより丈の終りまでは、繩の如く左捻りにし、衿幅の中央へ、白太白糸にて、圖の如く綴ぢ付け置くなり。


(表) (裏) (裏)

(十三)上前小衿先にシヤカを縫ひ付けたる所も、表より白太白糸にて、圖の如く止め置くなり。

(十四)袖を付け、縫目は裏の表に出し、折は袖の方へ返す。
 (十五)前後の八つ口を、単衣の八つの如く、綴ぢ付け置くなり。
 (十六)襷を裏表出し、裾口になす方を裏表縫ひ合せ、折は裏の方へ返し、表を裏へ二三分折り返し、次に両端を毛抜合せにして縫ひ合せ、折は裏へ返し、次に幅八寸に標をなし、裏幅の残りの端を、縫代だけ布の裏へ折り返し、其所と幅八寸の標とを合せて、裏の残り幅を二つに折り、其中に裏表の身頃を縫代だけ入れ、襷の両端は単衣の袂先の如く、斜に折り、 上前豎衿幅の端と、襷幅の端とを揃へて、待針を刺し、次に下前豎衿幅の端と、襷幅の端とを揃へて、待針を刺し、次に襷丈の中央と脊縫とを揃へて待針を刺し、次に前後共身幅と襷の丈とを揃へ、襷丈の残りし分は、左右の脇へ等分に出し置き、五枚共に縫ひ付け、折は襷の方

へ返し、次に襷の兩脇を裾口より幅七寸にし、身頃の脇の所まで斜に縫ふなり。

(十七)紐を紘けるには、紘目が裏幅の中央になる様にし、一方の端は紘け、一方の端は裁目のまゝになし置くなり。

(十八)紐を後身頃に付く、其付け方は、揚の止め即肩山より一尺二寸三分下り、脇より幅二寸入りたる所に、 圖の如く綴ぢ附くるなり。

(十九)前身頃の長き分は、後身丈に合せ、肩山より一尺九寸程下りたる所を、山にして疊み置くなり。

注意 單の時は袖口、八つ口、裾口、衿幅山、襷の両端等を捻紘にし、袖下を挾縫にす。

半臂

地質 綾又は平絹にして色は普通黒色を用ふ、

裁方 圖に就て見るべし。

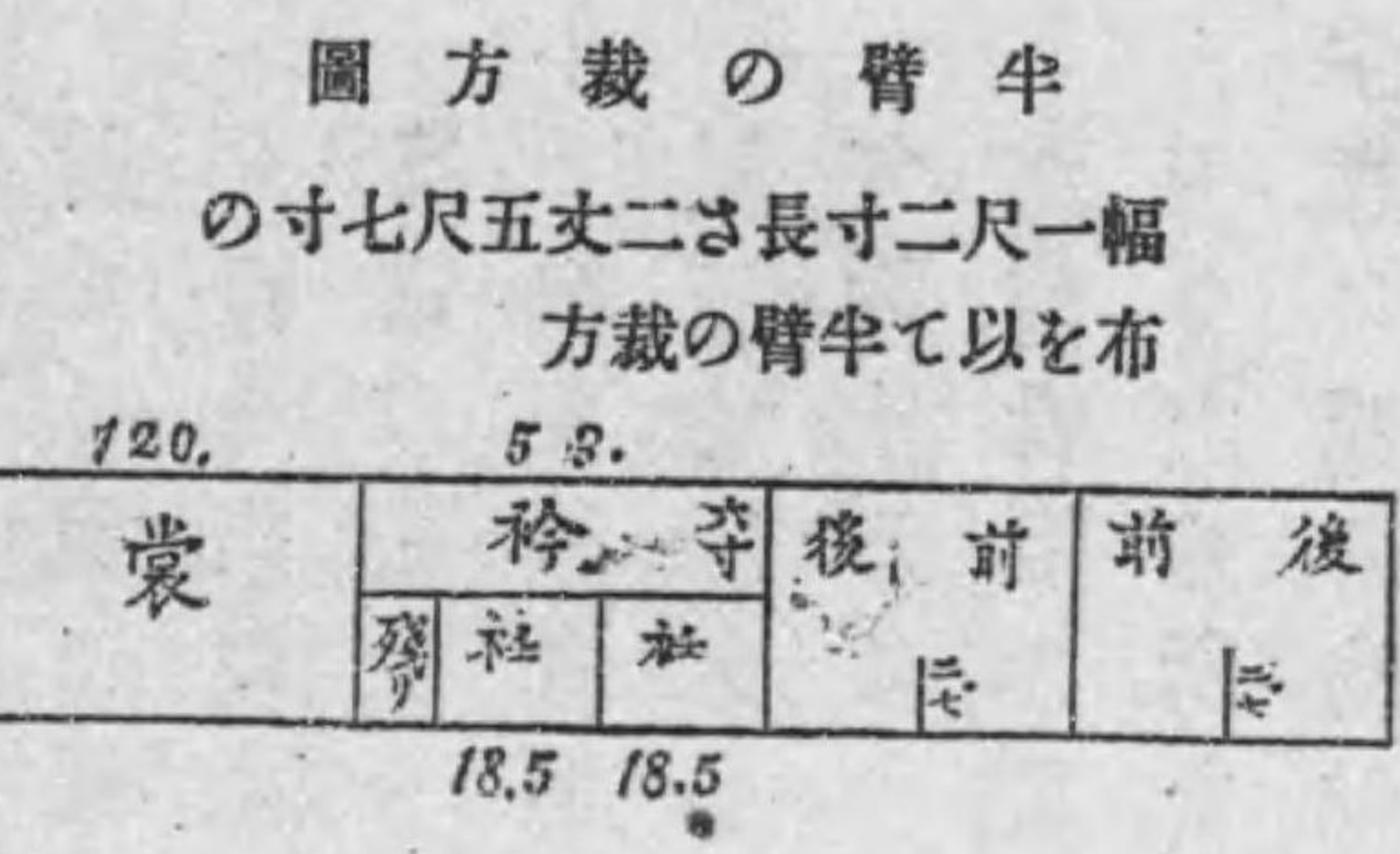
身丈 二尺一寸 裁切寸法

衿幅六寸 丈一尺八寸五分

衿幅六寸 丈五尺三寸

裳丈一丈二尺

衿肩二寸七分



忘緒は同布にて幅壹尺二寸、丈一丈〇四寸のものを幅四つ折にし、兩端を縫ふなり。

衿肩を開くる時、三寸前へ繰り起す。裏の裁方 表に同じ、唯襷のみは單なるが故、裏は入用なし、忘緒も表の用布にて作る故に、裏は用ひず。

仕立上寸法

身丈	二尺	後幅	九寸五分
前幅	六寸七分	衿幅	三寸七分衿下三寸三分
衿幅	二寸三分	脇明	一尺七寸五分

襷の丈八寸の上りにて、長さは兩端を一寸の上りに、裏へ折り返して、紵け附くるなり。

身頃は衿にして、襷は單なり(但し身にて襷を挟みて附く)。

脇明と衿山とは、裏表毛抜合せにす。

脇襷は襷を挟みて縫ふ時、縫ひ附けずして、襷の間に斜に折りて、綴ち附け置くなり。

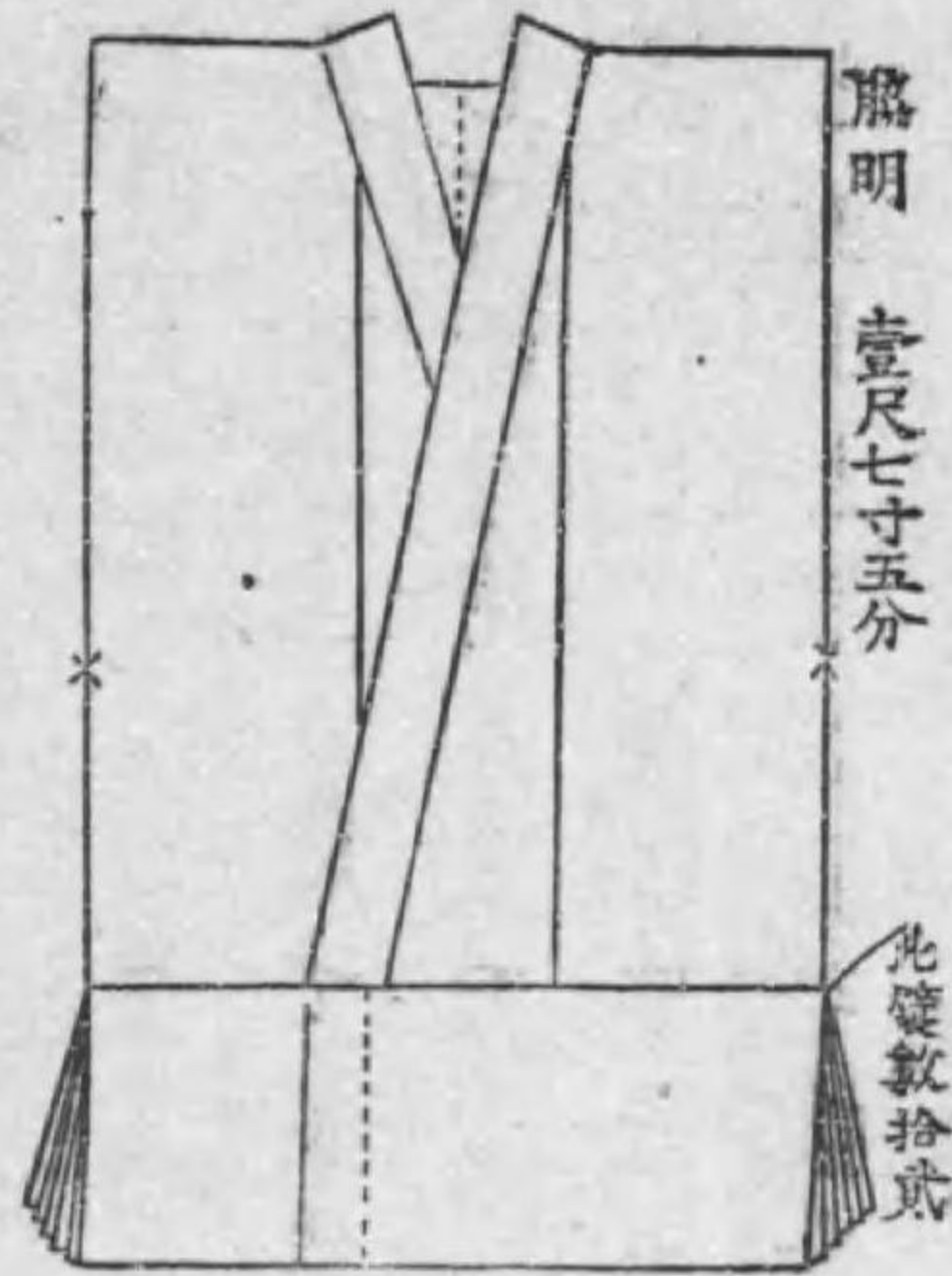
縫方

(一)表及裏の背と脇とを縫ひ、其折は普通の着物の如く返し、次に表と裏の脇明の標を合せて、脇明の所を毛抜合せに縫ひ、次に裏表の前身頃を衿肩より下まで綴ち、衿の如く

衿を四つ縫にして附く。

(二)衿を右の相褻の所より、左の相褻即ち衿附の止りまで、衿を附くる間を綴ぢ、次に衿の如く衿を四つ附にし、衿幅の標を附けて折を附け、衿山を表裏毛抜合にして紵けるなり。

半臂出上り圖



(三)襦の布を取り、裾口を幅三分の上りに、三つ折紵にし、次に両端を幅一寸の上りに、裏へ折り返して紵け、左右の脇に深さ一寸四分の襷を十二づつ取り、次に後幅の中央に幅二寸の巾着襷を取りて、襦の幅と身頃と合ふ様にし、次に其襦を袍と

反對に、身頃にて襦を挟みて縫ひ附くるなり。

(四)忘緒は幅二寸五分の上りに紵けるなり。

相

相は後世束帯の附屬物として、儀式ばかりに、衿として一枚着する様になりしなれど、今の胴着の類なれば、必ず着するとは定まらず、其仕立方は單と同様なれば略す(相は單と下襲との間に着す)。

着方順序

- (一)白襦袢(古の汗取)
- (二)白小袖(古の内著)
- (三)帯
- (四)襪
- (五)冠
- (六)下袴又は大口袴とも云ふ、紐を結ばずに置き、單を着せる後、紐を結ぶ
- (七)單
- (八)表袴(紐を結ばずに置き、下襲を着せる後、紐を結ぶ、但し下袴よりも丈を一寸短く穿つ)
- (九)下襲(此平緒に切平緒と長平緒とあり)
- (十)裾
- (十一)袍
- (十二)石帯
- (十三)太刀は及平緒にて結ぶ
- (十四)笏
- (十五)帖紙を懷中に入れ、檜扇を其帖

紙の中に挿す。(十六)沓(古は相を着せし後、表袴の紐を結び、次に下襲を著し、裾と下襲と別なれば、裾の紐にて結べり)

以上に記載せるは、縫腋袍及之に附隨せるものにて、下に擧ぐるは闕腋袍及それに附隨して用ふるものなり。

半臂

地質色相 (夏は穀織色は二藍、四位以下普通黒平絹、三位以上黒有紋、綾を用ふ。

裁方 圖に就きて見るべし。

仕立上寸法(茲には夏のもの擧ぐ、冬のは縫腋袍の時に記したるものと同じ)

身丈 二尺六寸

衿肩を明くる時、身丈を眞二つに折り肩山より二寸五分、後に下りて、三寸八分裁切にし、上り二寸三分にし、背にて一寸五分縫ひ込む

衿幅 一寸三分

身幅 前後一尺三分、前後七寸七分

衿下衿肩より三寸

衿幅 三寸四分

脇明 一尺九寸五分

裏腰帶幅 一寸四分

襦丈 一尺三分

長さ 一丈一尺四寸

縫方 (脇、裾口等撚紵にて刺縫)

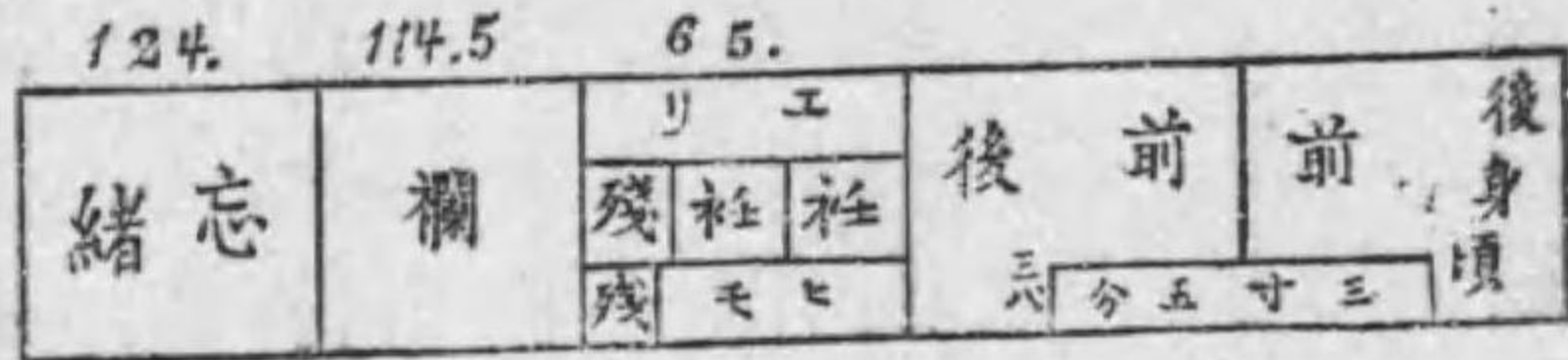
裁切寸法

後丈	二尺八寸	全幅	一尺二寸
衿肩	三寸八分	前丈	三尺二寸
全幅	八寸五分	衿丈	六尺五寸
全幅	三寸五分	衿丈	二尺九寸五分
全幅	四寸五分	紐丈	五尺四寸
全幅	四寸		

の分五寸五尺二丈四さ長寸二尺一幅 (單)の裁て以を布

(一)背を二目落しに刺し、折は普通に返す(大針五六分にて、大針は折の裏に入るべし)
(二)脇は明止より下二寸程下りし邊まで撚紵したる後、脇明より下布丈の終りまで

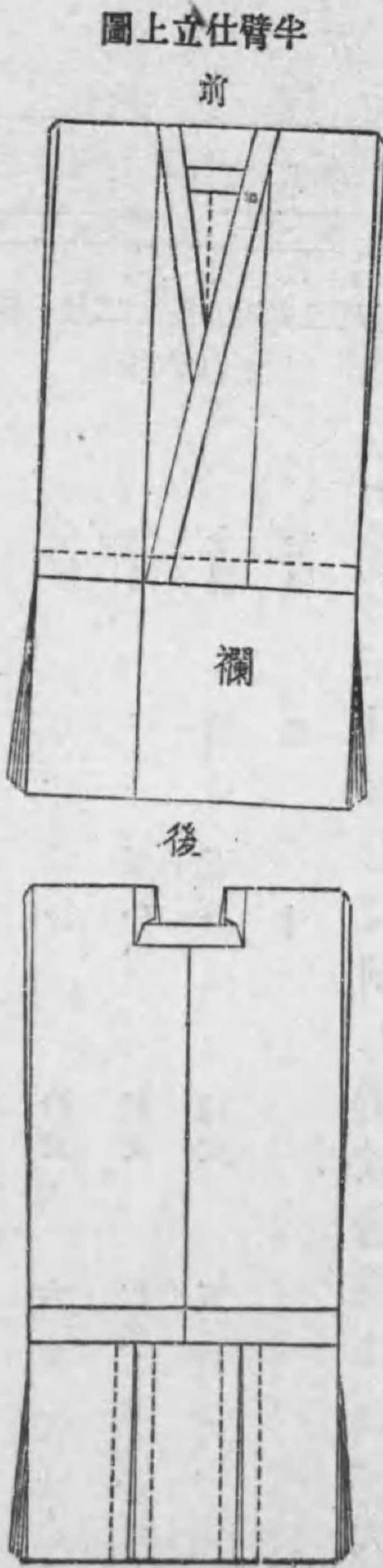
圖方裁臂半



縫ひ、折は前に返す。

(三) 衿にて前身を挟みて刺し、折は衿の方に返す。

(四) 衿を付け、次に普通に紵ける(衿先は裁目の儘になし置く)。



(五) 襦の裾口と両端とを捻紵にす。

(六) 全襦を取る、其取方は丈の中央にて左右へ幅三寸三分づつ寄りたる所を山にし、深さ一寸にして、中着襦を一寸づつ取り、次に襦の丈の中央と脊縫とを合せ、丈の中央より

左右に、後幅と同様にし、一方の端より、前幅と衿幅とだけ、襦の丈を取り、其残り布丈を襦にす、襦の深さ一寸づつにて、折山十七を作る。

(七) 身丈と襦丈とを定め、次に身丈標より、丈二寸八分縫込に依りたる所に標を付け、それより先の残りは、布の表に折返し、丈二寸八分を二つに折り、此中に襦丈の残りを入れ、身丈標と襦丈標とを合せ、身の縫込にて襦を挟み、両端を斜に折りて刺し、次に一寸四分の折山を、衿の紵目より紵目まで、針目五六分にし、裏表に小針を出し、布の間に大針を出して紵け付くるなり。

忘緒

一尺二寸幅を四つ折りにし、両端を折山まで縫ひ、引返し、端の縫代は一方に折り込み、折山の所にて極小針に一針出し

て、止め置くなり。

忘緒を著くる時の小紐は、幅上り一寸にし、普通の紐の如く
紵け置く。(古は忘緒と同じものにて結びしと云ふ)

下 襲

地質色相 四位以下穀織二藍、三位以上赤色穀紋紗。(是は關腋
の用にあらざ縫腋の時にも用ふ)

裁方 圖に就て見るべし。

仕立上寸法

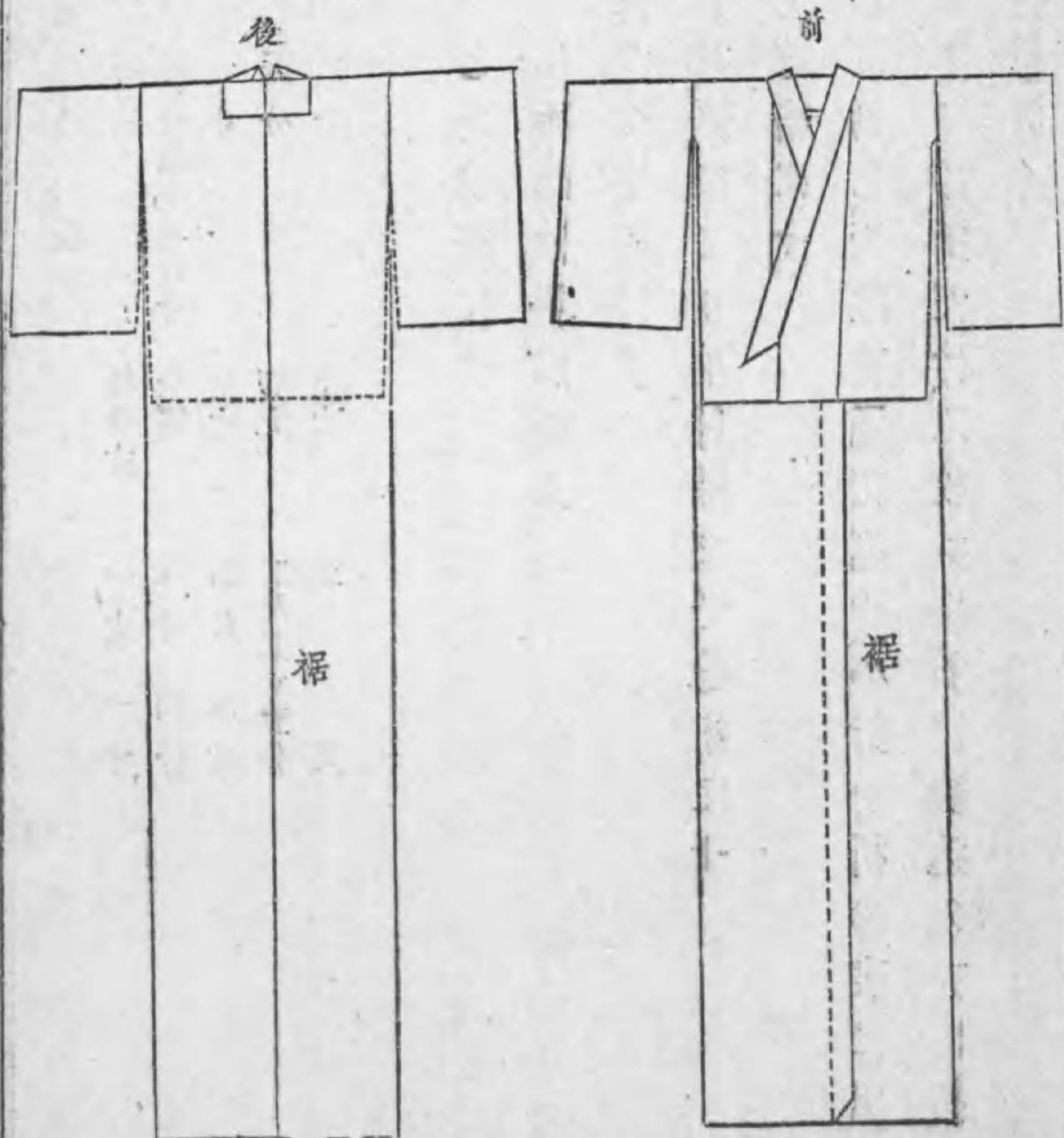
袖丈	一尺九寸四分	袖付前	二寸	後	八寸
全幅	一 杯	袖口	廣	袖	
前身丈	二尺四寸	全幅	七寸五分		
衿下	二 寸	小袂	五 寸		
衿幅	五 寸	相袂	四寸六分		
後身丈一丈全幅一尺	二寸四分	衿丈、衿付縫目の所より、幅山の方を一寸八分長くす			
		肩幅一尺	衿肩二寸四分		

下 襲 裁 方 圖

リ	エ	後	前	前	後	袖	袖
ノ	社	社	モ	ヒ	モ		
コ	リ		四	寸	四	寸	

(單)方裁の襲下て以を布の寸二尺八丈三さ長寸二尺一幅

襲 下 襲 下



裁切寸法		後身丈	
袖丈	二尺五分	一丈一寸	
前身丈	二尺五寸以上七八寸	八寸四分	
衿肩	四寸	四尺八寸	
全幅	三寸五分	二尺三寸五分	
紐幅	三寸六分	五尺	
		衿丈	
		全丈	

縫方(單) 捻紵

- (一)袖口と振八つとを捻紵にす。
- (二)袖下は袋縫にし、両端は斜に縫ふ。
- (三)裾口を布一枚づつ捻紵にす。
- (四)脇を前後左右共、裾口より袖付標まで捻紵にす。
- (五)衿下、衿、裾口を捻紵にす。
- (六)背を二目落しに刺し、折は普通に返す(小針を折の表に出す)、背の縫込は、裾口の所だけ、二枚共に斜に縫込の方に折返し、端を縫付け置く。

(七)衿の縫込にて前身を挟み、裾口は斜に折り、二目落しに刺し、折は衿の方に返す(大針は折込の中、即小針を折の表に出す)。

(八)衿先と衿幅山とを捻紵にす。

(九)衿幅標をなし、衿の縫込にて、衿と身とを挟みて刺し、折は衿の方に返す。

但し上前衿先は斜に裁落して、捻紵にし、下前は裁目の儘になし置き、衿を付けたる後、丈の縫込を斜に裏に折返し、紵付け置く仕立方もあり。

(十)袖の付け方は、袖山と衿下の所とを揃へて、前二寸後八寸付け、折は袖の方に返す。

同紐

同布即前落しの布にて、幅一寸、丈一杯に紵ける。

關腋袍

地質色相 四位以上黒、有絞穀織、五位赤全上、六位以下縹、無紋の穀織を用ふ。

裁方 圖に就て見るべし。

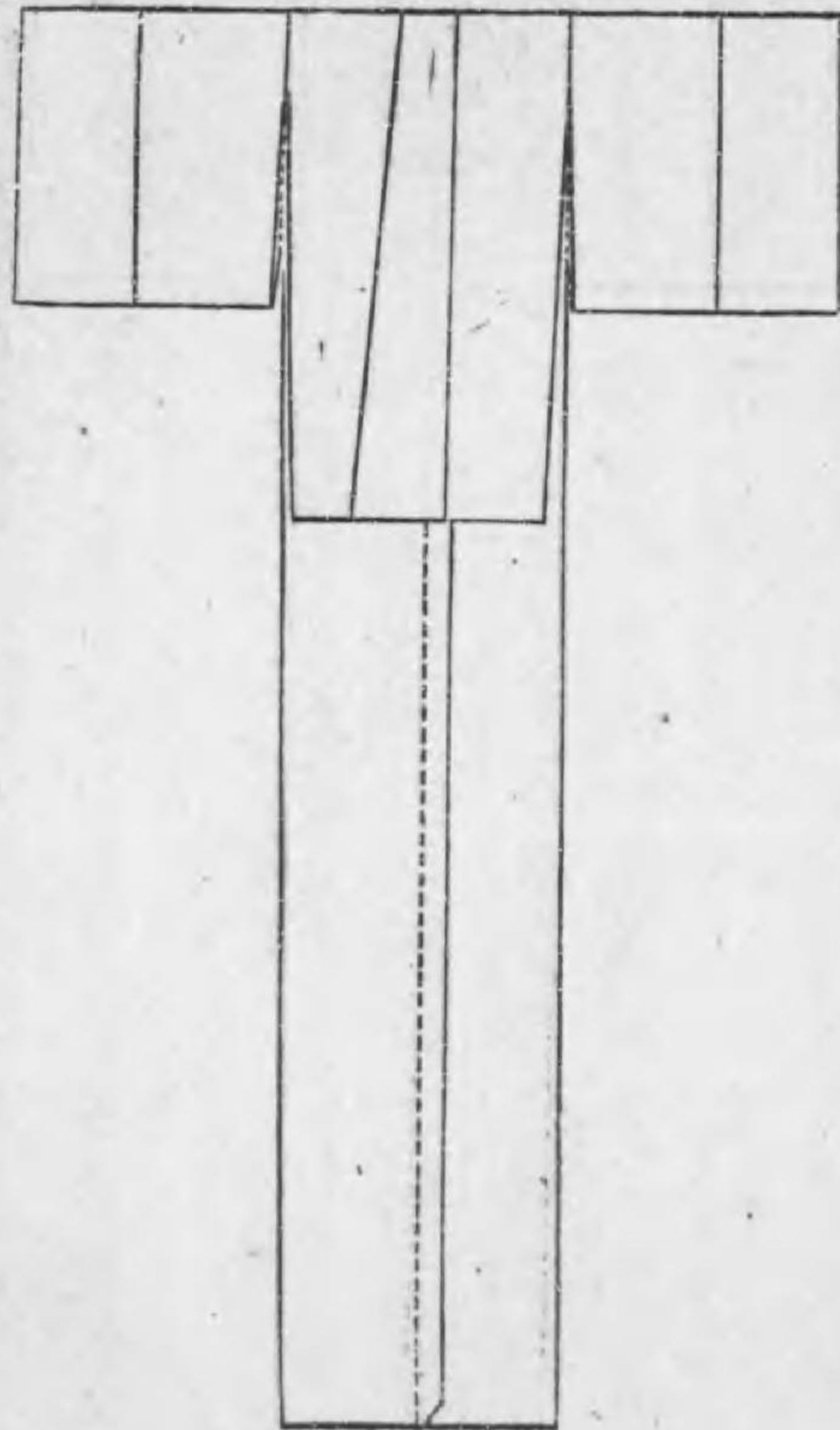
リエタ	後	前	後	袖	袖	袖	袖
リエタ	等	等	等				

を布の寸九尺七丈四さ長寸二尺一幅
つ裁のて以

裁切寸法	鱗袖丈	後身丈	衿肩	堅衿丈	全上	全幅	仕立上寸法	袖丈口	奥袖幅	奥袖丈	前身丈	頸	全幅裾口	小衿丈	付	鱗袖幅
二尺一寸五分	一丈五分	四寸	三尺五寸	四寸	二寸	一尺九寸五分	一尺五分	二尺	二尺	三尺八寸五分	三寸五分	六寸	二尺	一尺八寸	八寸五分	

袍 腋 關

前



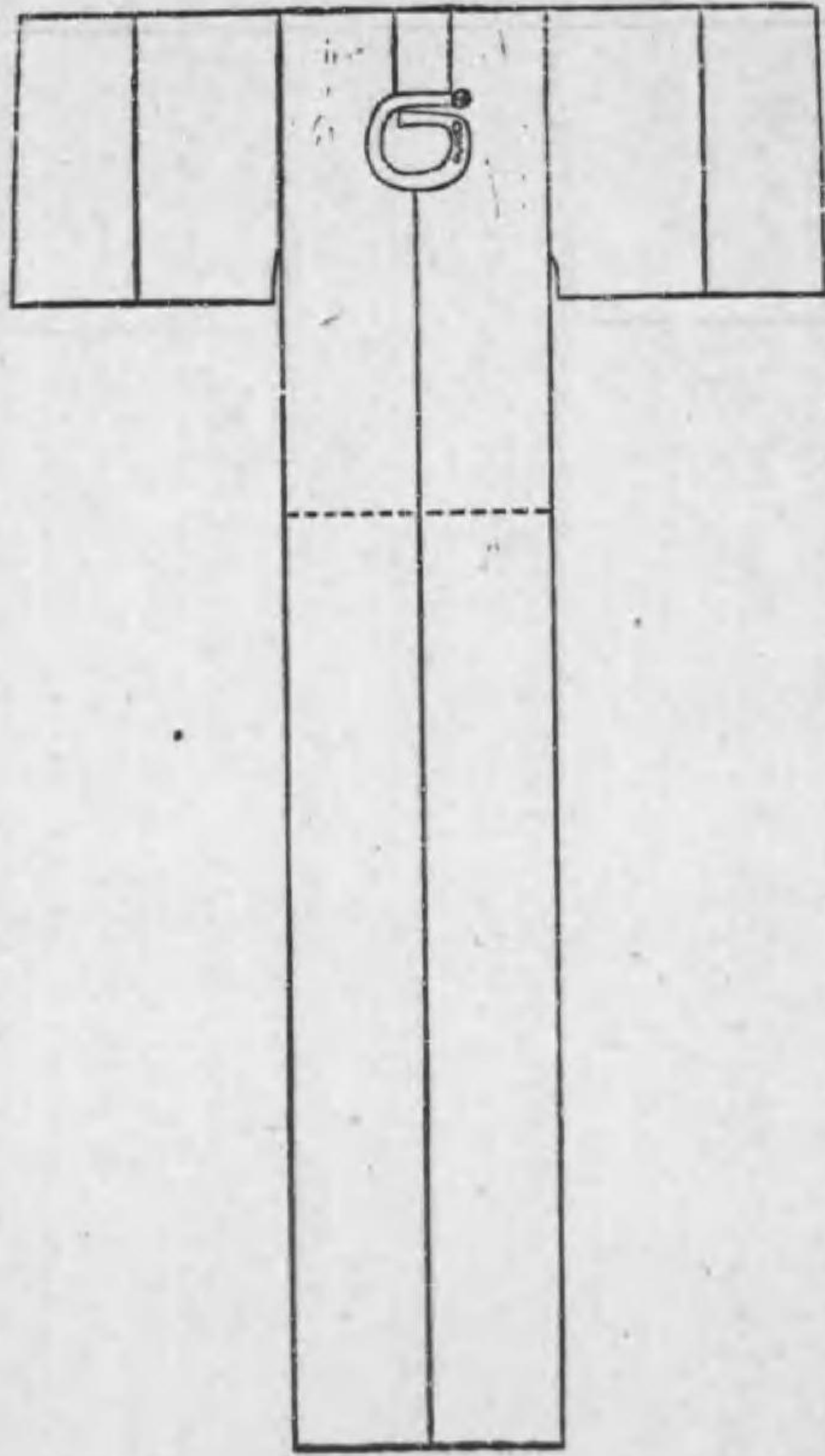
全付袖下 縫目を七寸後に繰越し、丈を二つに折りたる所を袖山と定め、肩と合せ、後五寸五分、前一尺二寸付く

前丈 三尺 八寸 幅 一尺 三寸

頸 三寸 五分

衿肩 四寸(内一寸の丸味を付く)堅衿幅裾口に五寸、上三寸になす

闕腋袍
後



下前 先は幅九分裏に折返し、丈一寸三分の間にて消ゆる様にす
 小衿 幅六分、丈一尺九寸、シヤカ結びの丈一杯、輪の方二寸五分
 後身 丈九尺四寸幅一尺 衿肩 二寸五分
 五位の後身丈肩山より五尺、四位は八尺、三位は一丈より一丈二尺
 前身丈は何れも同様。

縫方

- (一)口先と振八つとを捻紵にし、双方共幅標をなす。
- (二)罽袖の奥の方を、縫代だけ布の表に折返し、此折山と幅標とを揃へ、残り幅を眞二つに折り、其中に奥袖の縫込を入れ、三枚にて刺縫ひをなし、折は罽袖の方に返す。
- (三)袖下を下襲の如く縫ひ、折は前に返す。
- (四)身頃の前後の脇と、裾口とを捻紵にす。
- (五)後幅を一尺にし、背を二目落しに刺し、折は普通に返し、裾口にて縫込を斜に縫込の方に折返し、縫ひ付け置く。(但し背にて幅一寸五分縫ひ込む)。
- (六)前幅標をなす。
- (七)豎衿の裾口と、身に縫ひ付けぬ方、即幅の裁目の所を捻紵にし、次に幅標をなす。

(八)前身と豎衿の幅標を合せ、裾口にて双方の幅の縫込みを斜に折り、次に刺し、折は豎衿の方に返す(但し縫込を斜に折りたる儘)。

(九)下前豎衿の上部を幅九分丈一寸二三分の間にて斜に裏へ折返し置く。

(十)小衿に厚紙を心に入れ、下前豎衿を折返せし折山より、上前豎衿幅山まで付け、折は小衿の方に返し、次に小衿幅を定め、衿先の縫代を布の間に折返し、次に同布にてシヤカ結びを一つ作り、上前衿先にて表衿の裏に當て、布の表に白太糸にて×の如く縫付け置き、次に衿を締けるなり(但し衿先の止め方は、白糸にて裏表に針を出し、山に糸を跨がせ置くなり)。

(十一)輪は同布にて丈二寸五分にし、先の方は五六分を輪にし、残りを捻り合せ、肩山より七八分下りし所より付け初め、先より二分入りたる所にて一針、其れより一寸下りて一針、白太糸にて、初は結布の表に糸を出さずに縫ひ付け、次に結布の表に糸を掛け、裏は×の如くして留め置くなり。

○着する時、後身丈は下襲より少しく短くし、後腰の所にて、ハユエを作り、身幅は此所にて襲の深さを凡二寸位にし、左右に一つづつ取り、次に石帯を著く。

表袴

地質 四位以下普通表白平絹、裏紅平絹、三位以上表白、有紋の綾、裏紅平絹、但し四位以下と雖、特に禁色を聽されしものは、全じく有紋の綾を用ひしなり。
裁方 縫腋袍に用ふるものに同じ。

仕立上寸法

丈二尺三寸(裾口襷二分を別にす) 胯下相引八寸 裾口幅九寸 相引止にて一尺 上部の幅は襷を取上げ、紐下の所にて六寸七分づつにす(襷共) 幅幅白一寸九分赤二寸三分 紐幅幅幅に同じ 笹襷幅一寸七分 寄襷一寸五分 懷襷付縫目より、上前と後左右は一吋三分、下前一吋五分にす。襷は上り(上部の縫代を取る)四寸縫付く、紐丈白八尺九寸、赤九尺四寸(左右の先にて二寸五分づつの差前腰幅左右重ねたる所にて一尺一寸二分) 兩脇にて紐を丈一寸二分跨がす。腰飾大針十三、但兩脇に大針一針づつにす。紐飾左は白の先より七寸入り、幅の中央にて小針五つづつ、大針三寸三分にし、兩端に大針二針づつ、中央三寸三分の間にて鎖編の如くす。右は端より五寸五分入り、一尺五寸の間にて大針を、兩端に一針づつにし中央を左の如くす。

其他、縫腋袍に用ふる表袴と異なる所は、左の如し。

(一)相引止りにて、摘みて丈二分縫代にして、布幅の端より端

まで、縫目を特に作り、折りは裾口の方に返す。

(二)襷の深さを等分にす。

(三)襷の合せ方は、紵目の方と紵目の方とを合す。

○ 關腋袍を着用する時も、大口袴を用ふ、其の仕立方は縫腋袍に用ふるものと同様。

○ 石帶及平緒太刀は、必着くること、縫腋袍の場合に同じ。

關腋袍着方順序

- (一)白襦袢(古の汗取)
- (二)白小袖(古の内著)
- (三)帶
- (四)襪
- (五)冠
- (六)大口袴
- (七)表袴
- (八)單
- (九)下襲
- (十)半臂(忘れ緒を附す)
- (十一)袍
- (十二)石帶
- (十三)太刀(平緒を附す)
- (十四)笏
- (十五)帖紙(檜扇を添ふ)
- (十六)香
- (十七)弓箭(帯す)

注意 裁縫の仕方は、縫腋袍は冬物、關腋袍は夏物を説明したるを以て、口繪は反對に、關腋は冬物、縫腋は夏物を描き、以て兩者交互参照

の便に供せり。

全裁縫東帯の部終

大正二年十二月一日印刷
大正二年十二月四日發行

定價金五十錢



發行所	印刷所	印刷者	編輯者
東京市本郷區東竹町三十五番地 文部大臣私立東京裁縫女學校出版部 振替貯一九八二〇番 電話下谷三三三〇番 金東京	東京市京橋區新富町三丁目二番地 日新印刷株式會社	東京市京橋區新富町三丁目二番地 天野耕一	東京市本郷區東竹町三十五番地 渡邊滋

販賣所

東京市日本橋區
鐵砲町三番地

榊原文盛堂

振替貯金東京三〇九〇番 電話浪花三三二二番

293
146



御書

御書

御書

御書

終

